



世界遺産とわたしたち

大学生とともに紡ぐメッセージ

世界遺産

明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業
鹿児島エリア 登録 10 周年記念インタビュー誌

The World Heritage

Sites of Japan's Meiji Industrial Revolution Iron and Steel, Shipbuilding and Coal Mining
Area2 Kagoshima 10th Anniversary Interview Booklet
World Heritage and Us : Student Voices, Future Visions

監修

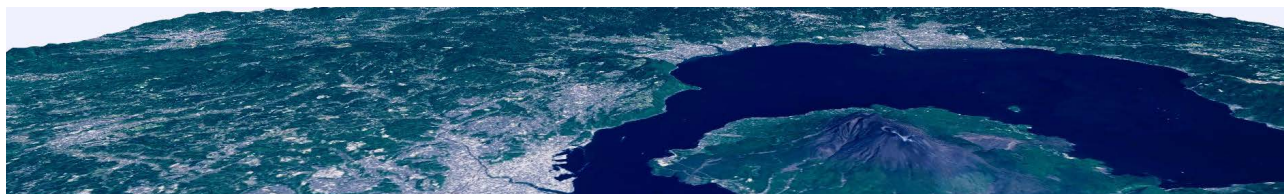
鹿児島市教育委員会文化財課

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

目次

趣旨説明	1
はじめに 世界遺産登録前史—薩摩のものづくり研究会のこと—（渡辺芳郎）	2
1 人が集う、未来を夢見る—旧集成館—	3
歴史を学ぶ最初の一步（田中佑之介）	3
親しみと愛着に包まれた世界遺産（上村宏明）	4
保全から見つめる世界遺産（三角将悟）	5
1000年の石、100年の仕事（福村秀美）	6
150年の記憶を未来まで（株式会社芙蓉商事）	7
世界遺産の安全・安心を支える警備（株式会社にしけい）	8
◆10年のあゆみ1 世界遺産登録後の管理保全（鹿児島市教育委員会文化財課）	9
◆10年のあゆみ2 松尾千歳さんとの思い出（田村省三）	10
2 火と木と石、挑戦は続く—寺山炭窯跡—	11
地域と歩む世界遺産継承の担い手たち（吉野東中学校 office 兵六）	11
魅力ある町内会活動に取り組んで！（仮屋耕二）	12
ふるさと寺山 地域のルーツを次世代へ（櫻井道廣）	13
次世代に託す「森との生き方」（川西基博）	14
消耗品にならないモノづくりを（昌本拓也）	15
人とのつながりの大切さを知る（井本裕介）	16
◆10年のあゆみ3 世界遺産と自然災害（鹿児島市教育委員会文化財課）	17
◆10年のあゆみ4 世界遺産寺山の森再生プロジェクト 人をつなぎ文化を育む森づくり（寺田仁志）	18
3 水はつなぐ、今も昔も—関吉の疎水溝—	20
世界遺産を学び、伝える（吉野中学校観光ボランティアガイド）	20
祖先の偉業称ゆべし、祖先の苦勞崇むべし（新村実・米元勝男）	21
ガイドを通じて広がる喜びの輪（烏山信幸）	22
地域と共にある物産館（玉利勇治）	23
この場所を「心のふるさと」に（新森和江）	24
人々の営みを書く（佐藤青南）	25
4 世界遺産の価値を伝える	26
郷土を誇りに思える歴史 伝え続けたい（下豊留佳奈）	26
知ろう、つなごう、世界遺産（東川隆太郎）	27
体験しよう！ かのしまの産業遺産（春山亮）	28
地域をつなぎ、歴史を語り継ぐ（永山恵子）	29
まち歩きガイドが語る歴史と未来への継承（久保英司）	30
未来へ残すという使命（佐々木幸男）	31
地域通訳案内士「ガイド」する力育てる（松田忠大）	32
◆10年のあゆみ5 世界遺産を体験する（鹿児島市教育委員会文化財課）	33
5 世界遺産の価値をみがく	34
鹿児島・世界の「宝」を分かりやすく伝える（桑波田武志）	34
世界遺産の保全と新たな価値創造（本中眞）	35
世界遺産登録というスタートライン（渡辺芳郎）	36
文化財の復旧に人の「思い」を（酒匂一成）	37
郷土愛をはぐくみ、先人の想いを次世代に（加世田尊）	38
次の世代へ「つなぐ」思いで（畠中麻衣）	39
小さな活動が世界遺産をつなぐ（藤井大祐）	40
◆10年のあゆみ6 世界遺産とまちづくり—普遍的価値の追求—（木方十根）	41
◆舞台裏 記念インタビュー誌制作プロジェクト 託された思い、未来に届ける（チーム Firebricks）	43
おわりに 世界遺産のためにわたしたちができること（石田智子）	46

趣旨説明



「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が2015年7月8日に世界遺産に登録されて10年が経ちました。ヨーロッパに端を発する産業革命が西洋から非西洋の日本へ伝播し、わずか50年あまりの短期間で急速な産業化を成し遂げたことを8県11市の23の構成資産で表すものです。鹿児島エリアの構成資産は旧集成館・寺山炭窯跡・関吉の疎水溝の三つです。いずれも島津斉彬が興した近代化事業である集成館事業と関連し、試行錯誤の挑戦段階から西洋の科学技術の導入段階に位置付けられます。日本の近代化への動きが鹿児島から始まったことを物語る貴重な遺産群です。

鹿児島の構成資産を見てまわると自然環境と人間活動の関係を強く意識します。世界遺産を守るということは、身近な自然環境や地球を大切にすることです。植物や土壌などの周辺環境の変化を注意深く観察し、対策に取り組む人たちがいます。子どもたちはどんぐりの苗を育て、豊かな森にすることを目指しています。「明治日本の産業革命遺産」は一目では価値が分かりにくいからこそ、ガイドや専門家の言葉で見え方が変わり、知れば知るほど引き込まれる魅力があります。世代をこえてメッセージをつなぐことで、世界遺産を大事にする人々の裾野が広がります。多くの人が世界遺産に関心を持ち現地を訪れることは望ましいですが、トラブルが生じることもあります。安心して快適に見学できるように、環境や設備、対応を整え、迎え入れてくれる人たちがいます。

世界遺産との関係はそれぞれにささいなきっかけで始まりました。近所にあるから、学校で活動したから、仕事だから、歴史が好きだから、なんとなく。でも、多くの人が、卒業や退職しても、立場が変わっても、活動を続けています。「世界遺産の価値を多くの人に知ってもらいたい」という共通する思いが根底にあります。大学生はインタビューを通して、世界遺産に関わる活動の多様なありかたを知りました。信念と誇りを持つ

て活動する人々の思いに触れ、多くの人に伝えることを望みました。願いを形にしたものが、このインタビュー誌です。

鹿児島の世界遺産は顕著な普遍的価値（OUV：Outstanding Universal Value）が認められて登録されました。OUVとは時空間を超えて人類が素晴らしいと感じる価値です。世界遺産というと遠い存在に思えますが、実際には身近なところに存在します。では、近隣に住むわたしたちにとっての価値はどうでしょうか。「世界の宝はわたしたちの宝」と胸を張って言えるでしょうか。登録前は価値があるものとはあまり認識されていませんでしたし、今でも知らない人もいます。世界遺産に登録されてから注目が高まり、興味を持ち、保全・活用に取り組む人が増えました。登録後の10年間には、自然災害による被害が生じて苦悩することもありました。でも、そのおかげで、地域やコミュニティのつながりがより深まることになりました。さらに10年後、50年後、100年後はどうでしょうか。未来の人々は今と同じように大切にしてくれているでしょうか。価値を問い直される局面も生じるかもしれません。価値は不変ではなく、時代や社会状況に応じて常に問われ続けるものだからです。

だからこそ、世界遺産の構成資産そのものだけでなく、登録前後に関わった人々の思いも合わせて未来に伝えることを決めました。これからは世界遺産が記憶の場となり、過去と現在と未来のわたしたちを結びつける存在として鹿児島の地にあり続けます。約150年前に試行錯誤を繰り返して近代化を成し遂げた人々がいます。その努力の証を世界遺産として認定し、皆で協力して調査研究し、守り、活用しているのが現在です。過去から現在へと積み重ねてきたわたしたちの思いを、未来のわたしたちにまらごとお届けします。

チーム Firebricks を代表して
石田智子

世界遺産登録前史 —薩摩のものづくり研究会のこと—

渡辺 芳郎

(鹿児島大学法文学部教授／集成館地区整備活用専門家委員会委員)

世界遺産登録のためには、その歴史的価値を証明する学術的な調査研究が必要です。その研究の端緒になったのが、鹿児島大学教育学部の長谷川雅康教授（現名誉教授）が2001年に立ち上げた「薩摩のものづくり研究会」です。集成館事業の解明を目的とした研究会は、鹿児島大学のプロジェクト「新しい地域学の創造—鹿児島学—」（2000～2002年）及び島津興業との共同研究を手始めに、科学研究費特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（通称「江戸のモノづくり」）の公募研究班として活動しました。その調査研究の成果は3冊の報告書『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』（2004年）、『近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置付けに関する総合的研究』（2006年）、『集成館熔鋳炉（洋式高炉）の研究』（2011年）にまとめられています。いずれも鹿児島大学リポジトリでPDF版を読むことができます。

「薩摩のものづくり研究会」の多岐にわたる研究成果のうち、もっとも重要なのは、集成館事業における近代工業の実現に日本在来の手工業技術が大きな役割を果たしていたことを示したことです。鶴嶺神社境内での発掘調査（2003～2006年）により、日本最初の洋式高炉（熔鋳炉）の地下基礎部分と付随する石組水路が見つかりましたが、その構築には在来の土木・石工技術が用いられています。水路には水車が設置され、水力で熔鋳炉の轆^{ふいご}を動かしていたと考えられ、これは鹿児島独特の製鉄技術に由来する可能性があります。また反射炉に必要な耐火レンガ生産には薩摩焼の陶工が関与し、試行錯誤の末、生産に成功したことがわかっています。第二期集成館事業における、日本最



集成館熔鋳炉に付随する水路跡

(写真撮影：2006年1月24日、写真提供：渡辺 芳郎)

初の本格的洋風石造建築物である機械工場（現尚古集成館本館）や、擬洋風建築の旧鹿児島紡績所技師館（異人館）にも日本の建築技術が使われました。

これらの調査研究によって明らかにされた、在来技術と外来技術との融合による近代工業の実現こそが、集成館事業の世界遺産としての OUV（顕著な普遍的価値）をもっとも端的に示しています。

集成館事業にはまだ多くの謎があります。世界遺産としての価値をより一層高めていくためには、さらなる学術的な調査研究が求められます。



田中 佑之介

尚古集成館 学芸員

歴史を学ぶ最初の一步

私が鹿児島県内の近代化遺産との関わりを持つようになったのは大学時代のことです。2017年から2020年まで「かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議」に参加していました。この会議は、市民・NPOが中心となって旧集成館などの近代化遺産の魅力を発信していくことを目的とするものです。その構成団体である若手会の代表を2018年より務め、PRイベントの企画や環境整備などさまざまなことに取り組んできました。

私たちの活動の中で代表として挙げられるものが、集成館事業に関する紙芝居動画の制作です。子どもたちに世界遺産に登録された県内の近代化遺産の魅力を知ってもらうことを目標に、外部の方のご協力をいただきながら制作を進めました。2020年3月、コロナ禍で活動が制限され始める中、配信にまで行き着き、多くの子どもたちが集成館事業に関心を持ってくれたという声を聞くことができたのは大きな成果だったと思います。

約3年にわたって若手会の活動に取り組む中で、私は「観光地としての鹿児島の魅力を発信したい」「薩摩の近代化遺産を活用して地域振興に貢献したい」と考えるようになりました。そして、大学院（博士前期課

程）を修了した後、2023年4月に名勝仙巖園や尚古集成館を管理・運営する株式会社島津興業に入社しました。現在は同社文化財部・尚古集成館の学芸員として勤務しております。

私の主な業務は、研究などの成果に基づき、集成館事業の歴史や意義を発信することです。日々「歴史を楽しく、分かりやすく伝える」ということを大切にして取り組んでいます。時折お客様が「知らなかった！」「初めて聞いた！」と驚かれる瞬間に立ち会えると、お伝えしてよかったと感じます。今後も、薩摩の歴史や文化に関心を持ってもらう最初の一步になるような案内を心がけていきたいです。

「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録されてから2025年で10年です。旧集成館などの県内構成資産もメディアなどで取り上げられる機会が増え、認知度も上がってきたと実感しています。また歴史研究もさらに進展し、これまであまり注目されてこなかった幕末の技術者に光が当たるようになってきました。彼らの努力があったからこそ、近代化が成し遂げられたのだと思います。今後も集成館事業を支えた技術者たちの功績が、多くの人々に知られ、評価されることを期待します。

1 人が集う、未来を夢見る―旧集成館―



上村 宏明

磯町内会 会長

親しみと愛着に包まれた世界遺産

約 20 年前になんとか海の近くに住みたいと思い、偶然空き物件を見つけて引っ越して磯地区にきました。その前は鹿児島市街地に住んでいましたが、この地域に魅力を感じて現在もこの地に住み続けています。子どもが生まれたことをきっかけに町内会に参加し、地域活動を手伝う中で、地域の方々とのつながりが深まりました。4 年ほど前に、前会長から引き継ぐ形で町内会長に就任しました。

この地域は、新たな住宅建設用地や賃貸物件が少ないのが実情です。そのため、新たな居住者を得にくいという課題もあり、高齢化も進んでいます。また、公立小学校への通学距離が長いため、子どもが小学生になるタイミングで転居するケースもあります。しかし、私を含め、住んでいる方々は、少々の不便さを感じながらも、それを補うに余りある魅力を感じ、この地を選んでいるのです。

住みたいと思う理由には、もちろん世界遺産への愛着が挙げられます。この地で生まれ育った住民にとっては、世界遺産に登録された場所は子どもの頃からの遊び場であり、特別な場所という意識はあまりなかったかもしれませんが、世界遺産登録をきっかけに価値を再認識する機会となったのです。世界遺産登録に向

けて、地域住民向けの説明会が2年間ほど定期的に行われました。磯地区の場合は、世界遺産に登録された場所は地域住民にとっての日常の風景でもあったのです。世界遺産登録以前は地域住民は「古いもの」として親しみを持っていたのが、登録を機に「守らなければならないもの」という意識が芽生えました。これは、単なる文化財保護というより、「自分たちの街の宝」という愛着に基づいているものです。

仙巖園駅が開業したことで、交通の便が格段に向上し、観光客も以前より多く訪れるようになりました。そのため、ビーチの通年利用や、宿泊施設、カフェのオープンなど、駅開業を契機としたインフラ整備が進んでいます。

これからは、世界自然遺産である屋久島や奄美地方との連携を図り、鹿児島の多様な魅力を発信していくことも視野に入れています。このようなさまざまな取組を通して、地域住民が持つ「愛着」を若い世代に継承し、地域を「見守り続ける」という意識を育むことが私たちの役割であると思います。

1 人が集う、未来を夢見る―旧集成館―



三角 将悟

株式会社島津興業
文化財部庭園管理所

保全から見つめる世界遺産

私が仙巖園や旧集成館の管理に携わるようになって、今年で7年目になります。庭園管理所の仕事は、開園2時間前の午前7時から始まります。庭園や施設内の清掃・点検を終えて、9時の開園に備えるのが日課です。ほかにも菊祭りなど季節の行事や催し物があるときは、それに合わせた準備や装飾をしたり、文化財課と打ち合わせを行ったりと内容は多岐にわたります。

このような日々の仕事の中で、お客様の「きれいだね」や「来てよかった」などの声が聞こえてくることが何よりの励みになっています。一方で、ここ数年は海外からのお客様も多くなり、いくつか課題も生まれました。そのため、庭園内の安全管理を見直したり、英語表記の看板を設置したりすることで課題の改善にも努めています。

また島津興業では職人の育成に注力しており、他県の文化財施設・庭園の見学や実際に現地の文化財庭園を管理している職人の方々とともに実技研修を行っています。出張や研修などでさまざまな地域の庭園を訪れましたが、そのなかでも京都の庭師の親方に「庭とはどういうものか」を教えていただいたことが印象に残っています。親方のお話を通して、庭の見どころや特色を理解することができ、それ以降仕事がよりいっそう楽しくなったのを今でも鮮明に覚えています。この

ように他県の庭園を訪れると新しい発見がたくさんあり、毎回楽しく学ばせていただいています。

私たち庭園管理所の仕事は、なるべくお客様の目に触れないように工夫しながら行っているため、裏方のイメージが強いかもしれません。とはいえ、そうした日々の積み重ねが、少しでも庭園の魅力を引き立てる一助になっていれうれしく思います。また仙巖園では、現在担い手間の年齢差が広がりつつあることもあり、庭園に関するすべての作業をこなせる人数に限りがあるのが現状です。そのため、樹木のマニュアルを周知したり、教育・育成に力をいれたりして、私を含めた中堅層が技術を高めることで庭園の維持・管理によりいっそう努めたいと強く思っています。

2025年に、旧集成館が世界遺産に登録されて10年が経ちました。実は仙巖園内にも集成館事業の一端を担った反射炉跡が残っています。そのため、仙巖園を訪れたときには、園内から見える桜島を眺め、反射炉跡や尚古集成館にも足を運ぶことで、斉彬が目指した近代化の時代に思いをはせてほしいと思います。特に、庭園は季節ごとに見ることのできる風景が変化するので、イベントをチェックして、何度も足を運んでいただきたいと思います。皆さまのご来園を心よりお待ちしております。

取材日：2025年6月11日 | 取材・記事作成：赤井・北園・徳野



福村 秀美

福村石材工業株式会社

1000 年の石、100 年の仕事^{わぎ}

この会社はもともと、小さな採石場として、お墓を作るための石を切り出していました。1965 年頃からは加工も始め、県や市から「こういう記念碑を作ってほしい」とか「ここの石を修復してほしい」といった、公共の仕事に携わる機会が増えていきました。現在では、石屋や石職人の数も少なくなっています。そんな中、世界遺産の一つである仙巖園の石垣がはらんできたということで、私たちに修復の依頼がきました。

世界遺産ともなると、石一つ雑に扱うことはできません。できる限り元の形のまま残し、なおかつ当時の手法を再現する必要があります。修復作業では、まず元の石垣の写真を撮り、図面を起こします。そして石を一つ一つ外して番号を振り、元の位置に戻していくという地道な作業を行います。大きいもので 50 ～ 60 センチメートルある石を、何千個と積み直し、完成までに 4 カ月ほどかかりました。昔は、石を固定するためのセメントはなかったため、石がずれないように敷石で固定する必要がありました。つまり、表面よりも、見えない裏側がより重要だということです。石は一つでも形が違えば、全体が変わってしまいます。積み直しでは、一定の間隔でいくつの石を収めるかを決めて印をつけていきます。石同士がぴったり合ったかどうかを判

断する材料は「音」です。隙間があるときは鈍い音がしますが、きれいにはまるとカンカンと澄んだ音に変わります。そう簡単にはいかないからこそ、面白さがありますね。

最近では技術も進み、ドローンや 3D 測量を使って、ほんの一日で石の形や大きさ、位置をデータで記録することができます。ただ、今でも積み方には、職人たちの長年の勘が欠かせません。

私たちがこのような世界遺産の修復に携われたのは、それまで積み重ねてきた一つ一つの経験があったからだと思います。仙巖園の石垣は、今から 300 ～ 400 年前に築かれたものです。そして、私たちが今回修復したことで、さらに次の数百年へ受け継がれていくでしょう。「石は 1000 年」といいますから。私たちの仕事は、自分たちがいない時代にも残るものです。そう思うと本当にありがたく、うれしいことです。

作り手としては、見える部分は昔のままに、見えない支えの部分には新しい技術も組み合わせ、後世に長く残せるものにしたいという思いもあります。先人が作った石は、一度壊してしまえば、二度と元に戻すことはできません。だからこそ、残せるものは残していけたらいいなと思います。

写真：福村秀美さん（右）。息子の福村貴之さん（左）には石垣の図面などを見せていただきました。

取材日：2025 年 5 月 31 日 | 取材・記事作成：京田・菰尾・山元

1 人が集う、未来を夢見る―旧集成館―



池田 寛郷
大迫 成人
霜出 優華
株式会社芙蓉商事

150 年の記憶を未来まで

私たちは鹿児島市からの委託を受けて旧鹿児島紡績所技師館（異人館）の管理業務を担っています。施設の維持管理や来館者対応など業務内容は多岐にわたりますが、その一つ一つが異人館を守り次の世代へと伝えていくために欠かせない役割を果たしています。例えば、開館中には火災や不法侵入を防ぐための巡回業務をします。異人館は日々の見回りが重要な防災対策となっています。

建物は、長崎県にあるグラバー邸のわずか4年後の1867年に薩摩藩によって建てられたものです。異人館は、西洋と日本の技術交流の象徴ともいえる建物です。館内では歪みや気泡のある古いガラスが今なお割れることなく使われ続けています。こうした歴史的価値のある建物だからこそ、管理には細心の注意が求められますし、責任感を持って取り組んでいます。風や雨、台風といった自然災害への備えはもちろん、床や窓の状態、木材の劣化など、日々の点検とケアを欠かすことができません。

来館される方は、県内外、さらには海外からもいらっしゃいます。最近では、クルーズ船の寄港とともに外国人観光客が増えてきました。ボランティアガイドの方々と協力したり、さまざまな言語のパンフレットを用

意したりすることで、多くの人に異人館の価値をお伝えしています。来館者には対話を通じて親近感を持ってもらうよう心がけています。世界遺産登録後は、来館者は格段に増え、地元の方々の意識も大きく変わったように思います。以前は異人館の価値を知る人が限られていましたが、登録後は「鹿児島の誇り」として意識していただけるようになりました。それはうれしい変化でした。

今、特に力を入れているのは子どもたちへの働きかけです。地元の小学校と連携し、春には綿花の種まきやスケッチ会、秋には綿花の収穫体験、糸作り体験、機織り体験が行われます。子どもたちの楽しそうな姿を見ると、異人館が次世代に愛されていると感じることができます。収穫した綿花は小分けして、来館者の方に持ち帰っていただけるような工夫もしています。

私たちの仕事は地道な作業ですが、皆さんが異人館を訪れ、歴史に触れるきっかけを守るために必要な役割だと感じています。皆さんにも、異人館に何度も足を運んで、地域の温かさや歴史を感じてほしいです。世界遺産は、過去の宝物であり、未来へのバトンです。明治の先人たちのように、挑戦する心を持って、異人館から未来への一步を踏み出してください。

写真：取材では、池田寛郷さん（右）、大迫成人さん（中央）、霜出優華さん（左）にご協力いただきました。

取材日：2025年5月24日 | 取材・記事作成：京田・菰尾・山元

1 人が集う、未来を夢見る―旧集成館―



株式会社にしけい

世界遺産の安全・安心を支える警備

私たちは2019年から旧鹿児島紡績所技師館（異人館）の警備を担当しています。異人館は日本初の洋式紡績工場を作った際に招いたイギリス人技師の宿舎です。イギリス人により設計され、日本の技術で建築されたといわれる、コロニアル様式の建物です。昼夜を問わず警備業務を提供することによって、世界遺産の維持に寄与し、全身全霊で安全・安心を提供しています。業務において日々この建物を拝見できるのは存外の喜びであり、身が引き締まる思いです。誇りを持って日々の業務を行っています。

異人館の警備は一般的な施設とは大きく異なります。何よりも大切なのは文化財の保護です。建物の老朽化や破損がないか、敷地内に異常がないかなど、細かく確認します。日中は一般開放されていますが、夜間は無人となるため、この時間帯の警備が主たる業務となります。具体的には、敷地内の巡回や設備の確認、火災や盗難などの異常を監視しています。建物自体が古いため、扉の開閉など巡回時の動作に細心の注意を払い、破損しないように慎重に行い、また夜間は暗いため、足元に注意しながら巡回しています。特に印象深いのは、セキュリティ機器の設置工事でした。歴史ある建物の景観を損なわないよう、そして建物自体

に影響が出ないように、穴の深さや機器の取り付け方には細心の注意を払いました。少しでも傷つけないよう、警備員としての役割だけでなく、文化財の保護者としての意識が常に求められます。

自然災害への備えも欠かせません。台風などへの対応のほか、火災報知器の確認や、万が一の際の初期消火活動への迅速な対応も常に意識しています。異常を発見した場合は、すぐに管理会社である芙蓉商事と連携を取り、協力して対応に当たります。現地の機器からの信号が24時間体制のセンターに送られ、迅速に駆け付けます。

私たち警備会社はあまり表にでることはありません。縁の下の力持ちとして最良な状態を保ち、次の世代にバトンを渡すことが使命であり、皆様が笑顔で安心して暮らせる街を作ることへの貢献が重要な役割です。人々の生命や安全、財産を守るため緊張感を持って業務に励んでいます。次世代の方々には、鹿児島の世界遺産の歴史や自然に触れる機会を持っていただきたいです。世界遺産を知って守る活動で、地域を越え人々との絆が生まれると考えています。

写真：取材では、写真左から楠生健一郎さん、左近充将さん、ジャスティーさん、小田裕樹さんにご協力いただきました。

取材日：2025年5月28日 | 取材・記事作成：上川路・出羽

世界遺産登録後の管理保全

鹿児島市教育委員会文化財課

2015 年 7 月、ドイツのボンで開催された第 39 回世界遺産委員会で「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界文化遺産に登録されました。

それは、この資産が「顕著な普遍的価値(Outstanding Universal Value : OUV)」を有し、一国にとどまらず人類全体にとって貴重なかけがえのない財産として認められたということであり、日本がその保全と管理に責任をもつということでもありました。

この資産は、8 エリア 11 サイトに所在する 23 の構成資産すべてで OUV を表わすシリアルプロパティです。各構成資産の管理保全については、それぞれの特性に合わせた管理保全計画(Conservation Management Plan : CMP)が登録推薦時に作成されており、登録後はこの計画に基づく取組を実施することとしていました。

2015 年の世界遺産委員会では、世界遺産登録とともに 8 つの勧告が決議されました。その中には優先順位を付した「保全措置の計画及び実施計画」を構成資産ごとに作成することなども含まれていました。

勧告への対応は、登録推薦時に閣議決定を受けて整備された管理保全の体制に沿って行われました。鹿児島エリアでは、関係省庁、自治体、所有者、地元代表などで構成される「集成館地区管理保全協議会」が、各分野の専門家で構成される「集成館地区整備活用専門家委員会」からの助言を踏まえながら勧告への対応を協議しました。

2017 年 11 月、これらの協議を踏まえて作成された『保全状況報告書』が日本からユネスコ世界遺産センターへ提出されました。その中には「保全措置の計画及び実施計画」も含まれています。

2018 年以降、鹿児島エリアの 3 構成資産ではこの計画に基づく保全措置や整備が行われてきました。旧集成館では、鹿児島世界文化遺産オリエンテーション

センターの建築、旧集成館機械工場の耐震診断及び耐震対策、旧鹿児島紡績所技師館(異人館)周辺の史跡整備など、寺山炭窯跡では、石積の変位測定・動態解析など、関吉の疎水溝では、見学路直下の旧水路遺構に関する発掘調査及び旧水路遺構の表示、転落防止柵の設置などの取組が挙げられます。

計画に記載した取組のうち、3 構成資産に共通するものとしては、年 1 回のモニタリング調査(写真)があります。モニタリング調査は、構成資産を形作る諸要素の部位や部材のほか、視点場からの展望景観を観察・記録し、経年的な変化を把握するもので、CMP にも記載していた取組です。

例年 12 月から 3 月にかけて実施しており、観察箇所は 3 構成資産で約 670 箇所及びびます。これらの多くは定性的な観察によるもので、その記録は個票(カルテ)にまとめられて保管しています。

登録から 10 年、モニタリング調査の成果は確実に蓄積されてきました。現在、鹿児島エリアで行われている保存整備事業は、この成果を活用しながら優先順位をつけ、計画的に実施されています。

(文章：世界遺産保全係 藤井大祐)



写真 モニタリング調査の様子(仙巖園)

(写真撮影：2025 年 1 月 17 日、

写真提供：鹿児島市教育委員会文化財課)

松尾千歳さんとの思い出

田村 省三

(株式会社島津興業常務取締役／集成館地区整備活用専門家委員会委員)



松尾千歳さん

2024 年 8 月 18 日朝、博多に向かう新幹線の中で松尾さんの訃報を知りました。2 年間の闘病で、入退院を繰り返しながらも、頑張って帰ってきてくれたので、にわかには信じられませんでした。

松尾さんとは 1985 年から約 40 年間一緒に働いてきました。彼は私の 6 歳年下ですが、私が中途採用だったため、職場では 3 年先輩になります。入社当時尚古集成館では『島津氏正統系図』出版のため、校正と読み合わせの最中でした。事務所の隣には、薩摩切子復元のための工房が設けられ、一方で島津家に伝わった価値の高い資料を収録する図録作成の準備も同時進行で進められていました。彼はその仕事の先頭に立っていました。

図録に載せる資料写真撮影の立ち会いも彼と私の仕事でした。当時、専用の撮影室はなく、毎日閉館後の館内に仮設でスタジオを設け、作業は明け方まで続けました。福岡県出身の松尾さんは、その頃一人暮らしで、仕事が終わると私の実家に 2 人で帰り、仮眠をとってまた出勤したことも懐かしい思い出となりました。

またその頃、京都国立博物館による島津家資料の調査が行われました。その時、京博の上山春平館長から、収蔵品の保管環境を改善することを勧められ、「頑張ってください」と激励されました。

その後、理想的な収蔵施設を中心とする別館の建設が決まり、予定地を発掘調査することになりました。調査は 1987 年の元旦から始められ、松尾さんも早朝から元気にスコップを握りました。ただ、尚古集成館一帯の敷地は国の史跡に指定されていたため、文化庁との協議には相当の苦労もありました。当時の島津修久館長と私は何度も上京し、その都度調整にあたったものです。松尾さんも相当気をもんだに違いありません。1989 年に別館が竣工すると、ここが彼の本格的な研究拠点となりました。

松尾さんは、南九州中世史の泰斗で鹿児島大学名

誉教授の故・五味克夫先生に師事し、生涯先生を敬慕していました。しかし、その研究分野は中世史にとどまらず、薩摩藩の近代化・工業化に関する研究にも及び、これらの成果が、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」登録の際、学問的裏付けとして活用されてきました。

尚古集成館が所属する(株)島津興業では、1994 年から 2 年にわたり実施された史跡指定地内の反射炉跡・熔鋳炉跡の発掘調査をきっかけとして、幕末の近代化事業の顕彰を始めました。2001 年には、尚古集成館や鹿児島大学などの研究者で「薩摩のものづくり研究会」を結成し、国の科学研究費補助金を得て、可能な限りの分野で近代化の検証を行いました。鉄を溶かす実験もその一環で行われ、この時の体験が世界遺産登録に際して来日した海外研究者の理解を得る説得材料になったことは記憶に新しいです。「明治日本の産業革命遺産」は、2015 年にドイツのボンで開催された第 39 回世界遺産委員会で世界遺産一覧表への記載が決定しました。2025 年は登録 10 周年を迎えます。この年に松尾さんが居ないのは、なんとも寂しいです。

彼は 2022 年、新潮新書で『秀吉を討て 薩摩・明・家康の密約』を出版しました。そのあとがきに「自分は鹿児島のことを誤解していた。また多くの人が誤解している」と書いています。鹿児島は、都や江戸から離れていたから文化的に後進的地域だと思われがちですが、海洋国家薩摩の視点からはまた異なった地平が見えてくるとの主張です。

松尾さんは、若い人と語ることが大好きでした。自分の史観を伝えたかったのだと思います。尚古集成館は若い研究者だけになったけれど、松尾さん、彼らをどうか見守っててください。

(2024 年 8 月 30 日付南日本新聞掲載の追悼文に加筆したものです。写真提供：田村 省三)

2 火と木と石、挑戦は続く―寺山炭窯跡―



地域と歩む世界遺産継承の担い手たち

私たち「office 兵六」は吉野東中学校の生徒によるボランティア団体です。活動内容は寺山炭窯跡でのガイド活動を中心に、地域イベントへの参加や文化大会での発表、どんぐりの植樹など多岐にわたります。特に春や秋はイベントが多く、毎週のように活動があることもあります。年によって人数は異なりますが、例年20名程度が参加しています。学年を問わず仲が良く、いつも和やかな雰囲気の中で楽しく取り組んでいます。

活動の中心となる寺山炭窯跡に関するガイド活動では、来場者に向けて炭窯跡の歴史的背景や保存の取組、過去の崩落などの経緯について分かりやすく説明しています。活動を始めたばかりの頃は炭窯跡について何も知りませんでしたし、人に分かりやすく伝えることにはとても苦労しました。ですが、活動に取り組む中で地域の歴史を深く学び、またその魅力を他の人に伝える力も身につけることができました。

活動の大きな魅力は学校の枠を越えて多くの人と関わることができる点です。同じ学校の先輩・後輩はもちろん、大学生や高校生、市の職員、地域の大人の方々など普段の学校生活ではなかなか出会えない人々との交流があります。その中で学ぶことも多く、視野が広がる貴重な経験になります。

これまでの活動の中で特に印象に残っているのは2024年度末に開業した仙巖園駅の開業記念イベントです。自分たちが寺山炭窯跡のガイドやパネル展示をしたことはもちろん、他団体のガイドさんたちとの交流やトークイベントなどを通して多くのことを学ぶことができました。

これまでの活動を通して考えたことは、鹿児島の世界遺産について地元の人々にもっと関心を持ってもらいたいということです。観光客の方々は多く訪れてくださいますが、地元の人たちが訪れる機会はまだまだ少ないと感じています。まずは身近な地域の皆さんに世界遺産の価値や魅力を知っていただき、関心を深めてもらうことが大切だと思います。そうした地域の輪が少しずつ広がっていくことで、鹿児島の世界遺産の素晴らしさが県外や海外へとより多くの人々に伝わっていくのではないかと考えています。

寺山炭窯跡の石積は大雨によって崩れてしまいましたが、崩れたことによって私たちの活動をはじめ多くの取組が行われるようになりました。活動を通して出会うことができた人々とのご縁は、この炭窯跡が結んでくれたものだと感じています。この大切なご縁をこれからも未来へつなげていきたいと考えています。

地球環境を守るかごしま県民運動推進会議から環境保全活動優秀団体として2025年6月30日に表彰されました。

取材日：2025年6月18日 | 取材・記事作成：渡部・上川路・出羽 | 写真提供：吉野東中学校

2 火と木と石、挑戦は続く―寺山炭窯跡―



仮屋 耕二

東菖蒲谷町内会 会長

魅力ある町内会活動に取り組んで！

私は長い間東京で会社員として働いていました。退職後、地元に戻って町内会の役員を引き受けてから14年目を迎えます。町内会の加入者はなかなか増えず、加入者対策は大きな課題です。魅力ある町内会活動を考えるときに、外資系企業で培ってきた合理的な企業運営を参考に町内会活動、行事・事業の実施内容、資金調達などの見直しを図りました。

「町内会に加入して良かった！」と喜んでいただける魅力ある町内会にするにはどうしたらよいのか？ これを考えるにあたり、伝統行事である七草祝式・鬼火焚き・六月灯夏祭り・敬老祝式などの実施内容について、できるだけ多くの方々に喜んで参加していただけるように見直しました。スポーツ活動も、町内会運動会・グラウンドゴルフ大会・屋内カーリング大会・町内会ゴルフコンペなどに多くの方が参加してくださるようになりました。町内会運動会は2023・2024年ともに300人の参加者があり、全員に弁当・飲み物を提供しています。ご飯を食べながら地域の人につながりを感じてほしいと思っているためです。

東菖蒲谷町内会のエリアには世界遺産の寺山炭窯跡があります。この資源を生かすために、2019年から寺山文化事業「寺山の森を育てよう！守ろう！！プロジェクト」をスタートしました。夏休み自由研究勉強会・

女子部勉強会は今年で6年目で、講師を招いて勉強会を実施してきました。町内会の役員・あいご会の子ども、父兄や町内会にある施設などにもご参加いただき、どんぐりの苗木を育てたり、寺山炭窯跡周辺の森に2022年5月・2025年5月と2回の植樹を実施したりしました。炭窯跡周辺の清掃作業も年4回町内会役員・有志・鹿児島市文化財課の職員の皆さんと行っています。

町内会長になり、鹿児島市衛生組織連合会の地球温暖化対策専門部の委員として活動してきました。毎年10月にかごしま環境未来館で開催される環境フェスタかごしまでは、2022～2024年の3年間で、どんぐりの苗木を来場者に配布したり、地球温暖化による異常気象やどんぐりの植樹などについて吉野東中学校の生徒や地元の高校生などにパネルガイドをしていただいたりしました。来場された多くの方々に地球温暖化対策や温暖化による異常気象などについて知ってもらう取組を続けています。

私の役割は先人の知恵を生かし、緑豊かな環境を次世代に引き継ぐことです。地域にある文化財を守るという活動が、最終的には地球を守るという大きな形につながっているということをこれから先の世代には意識してほしいと思います。

取材日：2025年6月15日 | 取材・記事作成：末川・山本

2 火と木と石、挑戦は続く―寺山炭窯跡―



櫻井 道廣

上之原町内会 会長

ふるさと寺山 地域のルーツを次世代へ

「櫻井先生ありがとうございました」。吉野東中学校の皆さんから届いた手紙は、今でも宝物です。生徒の皆さんによる手書きの文章が、粋いっぱい書かれていました。この言葉を中学生の皆さんが一生懸命に考えてくれたのだと思うと、とてもうれしくなります。

これまで私は、土曜日の授業や宿泊体験学習の機会を通して地域の子供たちと関わり、この一帯の自然や歴史の話を伝えてきました。私の孫も、中学生の時に世界遺産の魅力を伝えるボランティアガイドの一員として活動しました。地域に根ざした学びを実現するためには、学校の協力が不可欠です。吉野東中学校の宿里佳代先生には、本当にお世話になりました。この土地にはいつから人が住み始めたのか。ご先祖さまはどのような生活を送っていたのか。次の時代を生きてゆく若い人たちにも、自分が生まれ育った地域のルーツを知ってもらいたいです。

上之原町内会では、周辺地域の清掃活動を年2回のペースで実施しています。何十年も前から、住民がそれぞれの生活空間をきれいにする活動を続けてきました。寺山炭窯跡は7班の担当区域として割り当てられています。

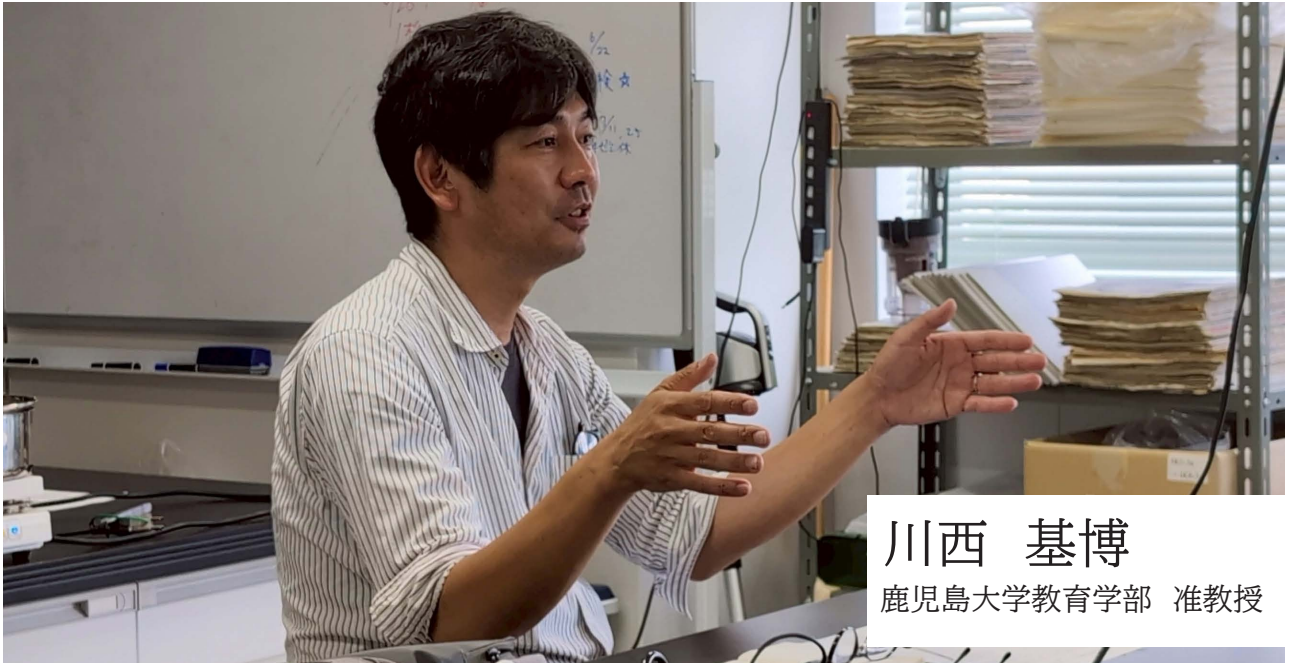
また、鹿児島市が行っている「世界遺産寺山の森再

生プロジェクト」にも参加しています。寺山の森を次世代へつないでいくために、みんなで山に入ってどんぐりを拾い、種子から育てる活動です。2024年は猛暑の影響でほとんどの苗が枯れてしまいました。また一からのスタートですが、めげずにまた挑戦したいです。

美しい自然に囲まれた寺山は、都会の喧騒を忘れてリフレッシュできる場所です。マイナスイオンを浴びながら、夏には蛍を、秋には紅葉を楽しめるような整備ができないかと、市に働きかけています。今後の展開次第では、市民の憩いの場になるかもしれません。多くの方に「来て良かった」と感じてもらえるはずです。是非足を運んでもらいたいと思っています。

昔は、ここで生まれ育った人でさえも炭窯跡の価値をほとんど知らない状態でした。しかし、近年は世界遺産への登録を通して認知度の高まりを実感しています。豪雨災害で炭窯跡が崩落した後は、いつ復旧するのかを尋ねてくる人もいたほどでした。大きな変化です。これを一過性のもので終わらせず、さらに関心を高めていくことが大切です。これからも、世界遺産に登録された寺山炭窯跡の価値はもちろん、その周囲で育まれてきた自然や歴史についても次の世代へ伝えていきたいです。

取材日：2025年6月14日 | 取材・記事作成：赤井・北園



川西 基博

鹿児島大学教育学部 准教授

次世代に託す「森との生き方」

私が寺山炭窯跡に関わるようになったきっかけは、炭窯跡が教育学部の実習地に隣接していたという立地上の理由でした。植物を専門にし、以前から寺山で調査を行っていたこともあり、「森の話をしてほしい」と中学生向け講習会で声をかけられたのが始まりです。また、鹿児島県立博物館や鹿児島市教育委員会文化財課とのつながりから、炭窯跡周辺の森林管理について協力を求められたことも関与の一因でした。

具体的な関わりは大きく分けて三つあります。一つ目はどんぐりの苗木を使った植樹活動です。炭窯跡に隣接する崩壊地に植樹をするために、教育委員会が地元の方や小中学生と苗作りを進めています。この活動と連携して教育学部の学生とともにどんぐりを集め、苗の栽培を行いました。その後も苗木の採取や業者への育成依頼などを通じて、植樹に関わる活動を続けています。

二つ目は環境教育としての講習会の実施です。現地で子どもたちに向けた活動を行い、自然や植物について学んでもらう機会を提供しています。これは単に知識を教えるというよりも、子どもたちが自然に親しみ、興味を持つことを目的としています。

三つ目は寺山における植物生態の調査です。長年続けてきた研究分野でもあり、世界文化遺産という枠組

とは直接関係がないように思われるかもしれませんが、自然環境の理解はこの世界遺産の価値を認識するにあたって重要なものです。

世界文化遺産の関係者と聞くと、文系のイメージが強いかもしれませんが、私のように理系分野から関わることで見えてくるものも多くあります。寺山炭窯跡の周辺には、絶滅危惧種や珍しいシダ植物なども含む多様性豊かな森が広がっています。なぜ街の近くにこのような森が残されているのか。これはおそらく、木材や木炭の原料をとるための薪炭林として人が維持・管理していたからでしょう。「木を切る＝悪いこと」のように思われがちですが、人間の暮らしの中で木を切って使うこともまた必要な行為です。文化や生活の中で自然とどう折り合いをつけていくか、それを考えるには文理の枠を越えた視点が必要です。寺山はそれを体現した非常に良いフィールドだと思っています。

最後に、今後の10年、100年を見据えたときに、次の世代に望むことがあります。それは「自然と人間の関係性を自分自身の感覚で考えていってほしい」ということです。過去の状態に戻すことだけが最良と考えるのではなく、今ここにいる私たちがどう自然とともに生きていくか。その視点を持って、ぜひ継承と発展の担い手となってほしいと思います。

取材日：2025年5月21日 | 取材・記事作成：上川路・出羽

2 火と木と石、挑戦は続く―寺山炭窯跡―



昌本 拓也
福岡大学工学部 助教

消耗品にならないモノづくりを

私が世界遺産に関わり始めたのは鹿児島大学大学院に在籍していた頃で、きっかけは偶然でした。私が専門にしている土木工学の研究は室内では終わらず、実際の場所で実証実験を行う必要があり、私の場合は実際の斜面を用いる必要がありました。そんなとき、鹿児島大学の酒匂一成先生とお話していると、酒匂先生の知人がたまたま鹿児島市に携わっていることが分かり、そこから寺山炭窯跡に関わるようになりました。

私は防災という側面から寺山炭窯跡に関わっています。炭窯跡は大雨によって石積が崩れましたが、その際に付近の斜面も崩れました。そして、炭窯跡と一緒に斜面の復旧が行われました。寺山炭窯跡は、炭窯跡と周辺の斜面に広がる森が一体となって歴史的景観を成しています。斜面を安全なものにしたいけども、コンクリートでガチガチに固めてしまえば景観が壊れてしまいます。そのため寺山では、その場にもともとあった植物で斜面を覆い、歴史的景観を維持しつつ、斜面を保護するという方法が取られました。この方法は、国立公園など、自然との調和が求められる地域でも用いられています。

こうした中で、植被率とよばれる、一定面積の土地を覆う植生の占める割合に注目しました。もともと植被率については、経験豊富なベテランが今何割植物が繁

茂しているというように定めるものであり、斜面の土砂侵食に対する抵抗性を示す指標でもあります。人によって変わってくる可能性のある主観的なものでした。これをうまく数字という客観的なものにしてみたいということがモチベーションでした。そこで、寺山の復旧した斜面で、ドローンを用いて画像解析して植物量を計測できないかと考え、調査を行いました。現在は、植物の回復過程を数字としてデータ化することを試んでいます。

寺山炭窯跡から原付バイクで5分くらいのところに親戚の家がありました。そのため寺山炭窯跡の存在は知っていたものの、一度も行ったことがなく、世界遺産になっていることも知りませんでした。しかし、それが軍艦島と同様のものに指定されていたことを知り、「ああ、実はすごいものだったのか」と感じました。そこから興味を持ち、身近に感じるようになりました。

単純に「造ればいいんだろ」というスタンスで作ると、消耗品になりすぐに終わってしまうかもしれません。そのため、ざっくり消耗品として造られたものとは反対に、物語的なものを反映させる工夫も必要ではないかと考えます。消耗品にならないモノづくりをするときに、土木工学に携わる人たちが現地の思いを反映できたらと思っています。

取材日：2025 年6月 11 日 | 取材・記事作成：京田・山元 | 写真提供：昌本 拓也



井本 裕介

熊本大学教職大学院

人とのつながりの大切さを知る

私は鹿児島大学を卒業し、現在は大学院で中学校技術科における3D プリンターの活用に関する研究を進めています。鹿児島大学の中等技術科で炭づくり・製炭体験活動を先輩から引き継いだことが世界遺産に関わるきっかけでした。大学3年次（2022年）の寺山演習林の調査の際に寺山炭窯跡の復旧について知りました。その頃、鹿児島市文化財課の藤井大祐さんから吉野地域での製炭体験の相談があり、花炭づくりを提案したことがきっかけとなり、2023年の町内会・文化財課主催のイベント、2024年にはNPO法人主催のイベントでの製炭活動につながりました。今では、地元中学校の校外学習で製炭活動が行われるようになったと聞いています。

製炭活動を行うにあたっては、文化財課の方々の協力を得ました。また、NPO法人よしのねぎぼうずのサポートもあり、イベントを円滑に進めることができました。イベントには、小学生から年配の方まで幅広い年齢層の参加者がいました。製炭体験活動を通して地域住民の地域への愛着やシステムへの理解を深めること、さらに子どもたちの感受性を豊かにすることが私の目標でした。

イベントに携わって、子どもたちの初めての製炭体

験に対する新鮮な反応を間近で見ることができました。保護者の方々からも自然に触れる良い機会であったと称賛の声をいただきました。また、大人が子どもたちから元気をもらったという声や、子どもたちが楽しそうにしているのを見て参加したいと思ったという感想も多くあげられました。これらの活動を通して、子どもや若い世代が世界遺産について知ることが大事であると思いました。また、子どもたちが参加するイベントに保護者も参加することで大人にも影響が広がるため、このような活動は今後も良い影響を与えることができると考えています。多くのコミュニケーションをとり、さまざまな人の思いを集めながら、世界遺産や地域への思いを大切にすることができればと思っています。

鹿児島大学に入る以前は世界遺産の存在自体知らず、大学3年生で研究を引き継いで初めて知りましたが、世界遺産の話題を日常生活の中で口にするのが大事であると感じました。一人一人が口にすることで話題が広がり、興味を持つ人が増えていくと思います。私自身、将来は中学校の技術科教師として、人とのつながりの大切さを子どもたちに伝えたいです。また、地元熊本にもある世界遺産とのつながりも広めていきたいと思っています。

世界遺産と自然災害

鹿児島市教育委員会文化財課

2019 年 6 月下旬、九州付近に梅雨前線が停滞し、前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、九州南部を中心に大雨となりました。6 月 28 日から 7 月 4 日までの総降水量は、400 ミリメートルを大きく超えた所があり、7 月の月降水量平年値の 2 倍となる大雨となった所もありました。また、6 時間・12 時間・24 時間・48 時間・72 時間の降水量が、県内各地で観測史上 1 位となりました。

このような大雨の中、6 月 28 日に構成資産「寺山炭窯跡」の炭窯遺構東側の石積が崩壊しました。7 月 1 日には炭窯遺構北東側の斜面地で土砂崩れが発生し、流入した土砂や樹木によって西側の石積が崩壊するとともに炭窯遺構の内部が埋没しました（写真）。土砂崩れの影響範囲は約 3,500 平方メートルに及びました。炭窯遺構は、世界遺産登録前後から石積の中腹が前にせり出す「孕み出し」が指摘されていたことから、定期的な変異測定を行いその動態を注視していましたが、周囲の斜面もろとも崩壊することは想定外の出来事でした。

寺山炭窯跡の被災状況を確認し、復旧に向けた検討を行っていた矢先、構成資産「旧集成館」でも大雨の影響によるき損事案が発生しました。7 月 14 日に仙巖園の石垣の一部が崩壊したのです。

構成資産の災害復旧は、被害の状況・程度を把握し、世界遺産価値（OUV）を含め文化財が有する価値への影響を考慮しながら復旧の方法を検討し、細心の注意を払いながら工事を行う必要があることから、多くの時間を要します。仙巖園石垣の災害復旧事業が終了したのは 2022 年 3 月、炭窯遺構の復旧工事は 2023 年 3 月に終了する予定でしたが、積み直した石積の一部が再度崩壊するというアクシデントが発生したことで、現在も復旧の途中です。

鹿児島エリアの構成資産は、地域資源を駆使して工場群を動かそうとした産業化初期の試行錯誤の挑戦を

物語る遺跡群とも言えます。いずれの構成資産も周囲の自然と一体となった景観を成しています。それは、自然災害のリスクと常に隣り合わせであるということでもあります。

2019 年の大雨災害と復旧を経験して、事後的な保全から予防的な保全へ移行するための取組を始めています。それまでよりも広い視野から災害リスクを把握、分析し、対策を講じて減災につなげようというものです。

近年、1 時間の降水量が 50 ミリメートルを超える大雨（短時間強雨）の回数が増加傾向にあり、その背景には地球温暖化があることが指摘されています。このまま温暖化が進行すれば、21 世紀末にはこのような大雨の年間発生回数が 1.7 ～ 2.6 倍に増加するともいわれています。

実は、寺山、仙巖園の災害発生前には 1 時間雨量 30 ミリメートルを超える強い雨が降っていました。一連の災害で、鹿児島エリアの構成資産は大雨の影響を受けやすいことが分かりました。

大きな問題ですが、世界遺産の保全という観点からも地球温暖化について学び、行動を起こす必要があるのではないのでしょうか。

（文章：世界遺産保全係 藤井大祐）



写真 寺山炭窯跡の被災状況

（写真撮影：2019 年 7 月 1 日、

写真提供：鹿児島市教育委員会文化財課）

世界遺産寺山の森再生プロジェクト 人をつなぎ文化を育む森づくり

寺田 仁志

(環境カウンセラー／集成館地区整備活用専門家委員会委員)

寺山炭窯跡は日本の近代化の礎をつくった証として世界遺産に登録されています。炭焼き窯としては巨大で、野石でなく加工した切石が使われています。この炭焼きに特別な思いがあり、大量の良質な炭となる樹木群が周辺にあったからに他なりません。いまでも吉野台地の法面には良質な炭の原料となるマテバシイやアラカシ、イチイガシ、スダジイなどの豊富な森が広がり、多様な生き物が住む森林生態系をつくっています。

2019年7月1日の豪雨で炭窯跡の北東側の斜面が崩壊し、斜面の木々もなぎ倒され広い裸地が発生し、炭窯跡の一部が壊れました。世界遺産に登録されている炭窯跡はすぐに回復処置を施すとしても、崩壊した森をどうするのかと議論になりました。放置したら再び災害が起こり、またセイタカアワダチソウやヒメムカシヨモギなどの外来生物が主要な草地群落が長期間維持される懸念もあります。コンクリート壁で覆うことや外来植物の種子の吹きつけなどは避けねばなりません。

そこで世界遺産に寄与する地域本来の景観を10年程度の短期間に取り戻す方法として、地域のちからで地域本来の森をつくる＝世界遺産寺山の森再生プロジェクトが立ち上がりました。



写真1 どんぐり拾い

プロジェクトは①地域本来の自然を調べる植生調査、②丈夫な生育の早い地元産の苗作り、③地域を支えるみんなの手による植樹、④植生管理の段階があります。

①の調査は崩壊前に事務局が世界遺産の保護管理のために調査しておりました。森はスダジイ、アラカシ、イチイガシ、マテバシイを主体とする森で、良質な炭の材料に資するものです。この森にはヤブツバキやヤマザクラ、クマノミズキ、エゴノキなどの季節の花を咲かせる植物種もたくさんありました。

②は地元産の種子ですくすくと育つ3年生のポット苗を作ります。近くの森でどんぐりを拾い、それを箱に撒き、芽出しを行って成長させ、ポットに植え替えて、3年間育て50センチメートルほどに成長した苗です。町内会や学校、社会教育施設の活動の一つとして、寺山の森周辺について観察会、どんぐり拾い（写真1）、種まき（写真2）、鉢上げイベントを行います。50センチメートル程度に成長し根の充満した苗ができるまで水やりなど注意を怠りません。

③の植樹は土作りのあと、添え木なしの密植（3本/1平方メートル）、稲わらによるマルチングの工程を含んでいます。樹木の生育には根から酸素の供給が必



写真2 種まき



写真 3 2025 年度プレ植樹

須です。土を軟らかくしてそこに添え木をしないで密植することで樹木同士がのびのびと自分の力で成長します。苗たちは一斉に成長することから風当たりを弱め、地面からの蒸発を弱めるなど協同して環境改善を行います。マルチングは降雨による土壌流出と成長の早い草本植物や蔓植物の侵入を防ぎ、時間が経つと土に還って苗の栄養になる稲わらで植林地を覆います。宮脇メソッドとよばれる植林法によるものです。

④の植生管理は間伐や施肥は行わず自然の力に任せます。植林 10 年経過以降には高さも 8 メートルを超えるようになります。そのときから間伐によって炭作りにも利用できます。

2025 年 5 月には地元町内会が主体のプレ植樹会を実施しました（写真3）。そのとき隣接地に 3 年前のプレイベントで植樹した苗はすでに4メートル近くに伸び、びっしりと繁っていました（写真4）。11 月にはこれまで地域で作った苗で本イベントが実施されます。

どんぐり拾いから植樹まで通算 4 年かかり、労力、費用の生じる植林ですが、地元の町内会、学校、園芸業団体のほか周辺地域からも積極的に関わって進行しています。プロジェクトはそれぞれの段階で寺山炭窯跡の歴史や価値、それを支える自然の役割を感じながら活動が行われます。この活動によって地域の自



写真 4 2022 年度植樹苗の状況

然や文化財の価値を理解し、地域の文化や自然環境は地域でつくり、地域の方々と結びつけ生き生きした地域社会がつくられているように感じます。このプロジェクトは世界遺産を統括する ICOMOS の関係者からも高評価を受ける事業になっています。

とはいえ、自然相手の活動には予期せぬトラブルはおこるもの。せっかく育てたポット苗も昨年の高温乾燥によって失われたものもあり、プロジェクトはこれからも長い期間続きます。活動に参加することで地域の自然、歴史、文化に思いをはせ心が豊かになります。今後ともご協力をお願い申し上げます。

（写真提供：鹿児島市教育委員会文化財課）

3 水はつなぐ、今も昔も—関吉の疎水溝—



吉野中学校 観光ボランティアガイド

世界遺産を学び、伝える

こんにちは！ 私たちは吉野中学校の観光ボランティアガイドグループです。地域にある関吉の疎水溝の魅力を伝えるため 2018 年に発足し、毎月 1 回、日曜の午後に現地でガイドを行っています。希望者が自主的に集まり、現在は 1 年生から 3 年生まで 10 人で活動しています。

観光ボランティアガイドのきっかけはさまざまです。近くに住んでいて関心があった人、先生や友達に誘われて入った人、小学校の校外学習で訪れて「もっと知りたい」と思った人、歴史や自然が好きで関吉の疎水溝にも関心があった人。中には、「人と話すのが苦手だったので、この活動を通して自分を変えたかった」という理由で参加した人もいます。

活動では関吉の疎水溝の歴史や仕組みを調べ、自分たちの言葉で説明しています。準備段階では、先輩たちから引き継いだ資料を参考にしたり、新しい情報を調べてグループの仲間で共有したりします。毎回伝え方を工夫しながら、来場者に分かりやすく説明することを大切にしています。

うまく説明できた時、「分かりやすかったよ」「ありがとう」と声を掛けてもらえた瞬間が一番うれしいです。一方で、言葉の選び方が難しかったり、声のトーンや抑揚が単調になってしまったりして、悩むこともありま

す。でも、だからこそ挑戦する意味があると思っています。

活動が続けるうちに、世界遺産や地域の歴史への見方も変わってきました。以前は吉野にある遺産を調べようと思ったことはありませんでしたが、観光ボランティアガイドの活動を通して、昔の人の技術や努力を知り、誇らしく感じるようになりました。さらに吉野の他の場所にも興味を持つようになり、今では鹿児島全体の歴史にも関心が広がっています。これからもガイドを続け、もっといろいろな人に関吉の疎水溝を知ってもらいたいです。普段あまり歴史に興味が無い人にも、「関吉の疎水溝はすごいんだ」と思ってもらえたらうれしいです。私たち自身も、活動を通して成長していけたらと思います。

10 年後も世界遺産が今と同じように地域の人に大切にされていたらいいと思います。関吉の疎水溝は、集成館事業のためにわざわざ造られたのではなく、地元の人に日常的に使われていたものを活用したものです。そして、先人の努力によって守り育てられた貴重な遺産です。この先、関吉の疎水溝が人々に忘れられてしまうのではなく、「将来に残す意味がある」とこれからも思ってもらえるように、「将来に残すべき人類共通の財産である」と伝える努力を続けていきたいです。

取材日：2025 年 6 月 25 日 | 取材・記事作成：末川・山本

3 水はつなぐ、今も昔も一関吉の疎水溝―



新村 実

下田町内会 現会長
(写真後右)

米元 勝男

下田町内会 前会長
(写真後左)

祖先の偉業^た称ゆべし、祖先の苦勞^あ崇むべし

私は下田町内会の現会長として、世界遺産に登録された地域の水路や景観の保全活動に取り組んでいます。前会長の米元勝男さんから受け継ぐ形で定期的に草刈りや清掃活動を実施し、町内会全体の年4回の共同作業を中心に進めています。水路はもともと生活に欠かせない設備であり、住民にとっては「世界遺産」としての認識は薄かったのです。そのため、世界遺産登録は驚きであり、信じられないという声も多かったです。そこでその価値を住民に伝えるために、女性部が祭りや広報の場で横断幕を掲示したり、歴史や文化を伝える活動を行ったりしています。その一環で、地域の歴史を伝えるための「300年のその昔 関吉の疎水溝讃歌」という歌を作詞・作曲しました。この歌は小学校で歌い継がれ、地域の記憶をつなぐ大切なツールになっています。

家事の合間に現場へ赴き、雑草の伸び具合や水路の状態を確認して整備することが日課です。町内会の定期作業日以外にも、週に一度は現地で手入れを続けています。6月はアジサイ、秋はコスモスが咲き、散歩道としても多くの住民や観光客に喜ばれています。冬場は観光客も少なく、夜間のライトアップもしていません。10年前まではこのあたりにはたくさんの蛍がい

ました。

一方で深刻な課題もあります。町内会を支えるメンバーの高齢化が進み、現在は65歳以上が大多数で、平均年齢が上昇。かつて390人いた加入者も260人程度に減少。若い世代、特に子育て世代の参加がほぼありません。PTAや子ども会の活動もなくなり、学校行事は参加しても町内会には関わらない親世代が増えています。このままでは10年後には保全活動の担い手がいなくなると強く危惧しています。そこで私は「小学生や保護者を巻き込む教育プログラムや体験学習」の必要性を提唱しています。我が子の口から世界遺産の言葉が出ると、保護者も自然と興味が湧くでしょう。地域にある世界遺産の価値を子どもの頃から心に植え付け、家族ぐるみで関わる機会を設けることで、ふるさとへの誇りと愛着を育てたい。その連鎖が続けば、数十年後も地域文化が生き続けると信じています。

「祖先の遺業 称ゆべし」「祖先の苦勞 崇むべし」という疎水溝讃歌の歌詞に表れているように、地域の誇りと誓いをこれからの世代にも引き継ぎたいと心から願っています。私たちが暮らすこの場所を、子どもたちが「また帰りたい」と思う、そんなふるさとにするために、一歩ずつ進んでいきます。

「関吉のアジサイロード・桜並木を主とした自然の景観で彩る下田町」が第7回鹿児島市景観まちづくり賞景観部門を受賞しました。

取材日：2025年5月29日 | 取材・記事作成：有村・末川・山本

3 水はつなぐ、今も昔も一関吉の疎水溝―



烏山 信幸

鹿児島ぶらりまち歩き
かごしまボランティアガイドの会

ガイドを通じて広がる喜びの輪

観光ボランティアガイドを始めるきっかけになったのは、県外から来られた方がパンフレットを手にして道に迷っているところにお声がけしたことでした。その方が「西郷隆盛の銅像まで行きたい」とおっしゃったので、実際にご案内したところ、大変喜ばれて、たくさん感謝の言葉をいただきました。相手の方がうれしそうにしているのを見て私自身も温かい気持ちになり「こんなに感謝されるのか」と強く心に残りました。ちょうどその時期にガイドの募集があったため、思い切って応募をしました。やりがいとはとても大きいですが、最初はとても大変でした。無知の段階から人に説明できるようになるには多くの知識が必要になるため、猛勉強の日々でした。

関吉の疎水溝は、県外の方よりも地元の方が多く訪れる場所で、皆さん「もう知っている」と案内を断る方も多いです。でも、実際に案内してみると、場所の名前を知っているだけでどんな背景があってどんな理由で世界遺産になったかを知っている人はとても少ないと感じました。そうした方々がガイドを聞いて「よく分かりました。聞けてよかったです」と言ってくださると本当にうれしいです。ガイドでは自分が案内をしたお客さんは再び会うことはないのが普通です。しかし、

一度ガイドを聞いたお客さんが他の団体の人たちも連れてまた訪れてくださったことがありました。そのときは本当にうれしく、「続けてきて良かった」と心から思いました。異人館や関吉の疎水溝は、夏は暑く冬は寒いので、ガイドが長く難しくなりすぎると、聞き手の集中が続きません。ですので、分かりやすくストーリー性を持たせて説明することをいつも心がけています。ガイドで大事だと思っていることは自分がうまく説明できたと自己満足になってはいけないことです。お客さんが喜んでくれたかどうか「良いガイド」かどうかの基準だと私は思っています。

懸念点は、ガイドの高齢化が進んでいることです。現在活動しているボランティアガイドの多くは、定年退職後に始めた 70 代や 80 代の方が中心となっています。そうした中で、吉野中学校では 7、8 年前から生徒によるボランティアガイドの育成に取り組んでいます。卒業した生徒の中には、高校生や大学生になってからも活動してくれる方もいます。こうした若い世代が育ち、積極的にガイド活動に関わってくれていることは大変心強く思います。今後もそういう人が一人でも多く増えてくれることを願っています。

3 水はつなぐ、今も昔も—関吉の疎水溝—



玉利 勇治

社会福祉法人麦の芽福祉会
理事

地域と共にある物産館

関吉の疎水溝の周辺にはほとんど店がなく、地域住民からは買い物の場所がほしいとの要望がありました。社会福祉法人麦の芽福祉会としても、私たちが「なかま」と呼ぶ障がいを持つ人たちが、下田の町で熱意を持って仕事をしたり暮らしたりできるようにしたいと考えていました。そのようなときに関吉の疎水溝が世界遺産に登録されたので、物産館の計画段階から疎水溝を意識していました。

関吉の疎水溝は、鹿児島に所在する世界遺産の構成資産の中ではメジャーではありません。地域でもよく知らない方が多いです。だからこそ、毎年最低1回は地域の方と一緒に下田の歴史や関吉の疎水溝の歴史を学ぶ催しなどを行っています。下田には古い歴史があり、縄文時代にはとても栄えていたそうです。みんなで学習し、歴史全体の中に疎水溝を位置付ける話などを行っています。田んぼでジャズコンサートをしたり、カフェを開いたりもしています。

世界遺産を意識した物産館を造るにあたっては、疎水溝の見学者に向けて駐車場やトイレを整備・開放したり、疎水溝までの道に植えられた花の手入れをしたり、定期的に疎水溝周辺の草刈りや清掃をしたりしています。疎水溝入口にある案内所の鍵開けと施錠も物

産館が担当しています。「地域と共にある物産館」をコンセプトに掲げ、多様な人々が関わる場所として機能しています。物産館や敷地内のカフェ運営を通して、なかまが仕事をする場を提供しています。彼らが誇りを持って働き、地域住民に理解され、溶け込むことを目指しています。

物産館は、地産地消を促進し、地域経済を支えるため、地元の農家が生産した新鮮な野菜の直売所としても利用されています。約200名の農家が登録していて、野菜を買いに通う地域の方もいます。野菜だけでなく、焼き芋やソフトクリームが好評を得ています。

最近、大型バスツアーの立ち寄りも増えました。世界遺産を特集した日本一周クルーズを利用した観光客の方もいらっしゃいました。これは、世界遺産があり、世界遺産を知りたい広めたいという気持ち、そしてなかまをはじめとする地域の活躍があったからこそだと思います。

世界遺産と地域の思いがうまく合わさって事業が動き出している感覚があります。これからはさらに、関吉の疎水溝が「明治維新の影の立役者」であったことを含め、その重要性をより多くの人々に知ってもらいたいと考えています。

取材では、東中村守さん（せきよしの物産館館長）にもお話をうかがいました。ありがとうございました。

取材日：2025年7月4日 | 取材・記事作成：上川路・山元

3 水はつなぐ、今も昔も—関吉の疎水溝—



新森 和江

稲音館 オーナー

この場所を「心のふるさと」に

私が世界遺産に関わるようになったのは、2015年に関吉の疎水溝が世界遺産に登録されたのがきっかけでした。翌年、一周年の記念に何かできないかと思っていたところ、体育の先生をしていた石野さんが「このあたりは歩いていて気持ちが良いから、ウォーキングをやってみたらどうか」と提案してくれました。それから、月に一度、予約もお金も要らず、誰でもふらっと参加できるウォーキングイベントを始めました。1キロメートルほどのコースを、桜や田植え風景など季節の自然を感じながら歩くと、気持ちも体も元気になるんです。

今年はさらに、世界遺産の魅力をより多くの人に知ってもらうため、疎水溝に沿って磯庭園まで行くウォーキングを計画しています。歩いた後は、稲音館でお茶を飲んだり、演奏会を楽しんだりして、ゆっくり過ごしてもらえるようにしています。

この稲音館を開いて、今年で20年になります。地元でとれるお米や旬のお野菜を使った料理を提供したり、ギャラリースペースでは地域の方々の作品展や演奏会を開いたりしています。デッキでは、田園風景を眺めながら、せせらぎや風鈴の音を聴いて、ゆっくりしてもらえるのがうれしいんです。実は、稲音館という名前にもそんな思いを込めました。発想のイメージは、

田んぼの中にあるので稲（イネ）の音（オト）の館（ヤカタ）、「稲音館」（トウオンカン）と名前を付けました。「稲」の「トーン」（tone）という響きは音楽にも、絵画にもつながります。

関吉の疎水溝が世界遺産に登録されてからは、県外や海外からのお客さんも増えました。世界遺産に負けないようにと、看板もきれいに作り直したんですよ。そうして、観光地として町全体が少しずつ元気になり、皆が協力的になっています。

昨年、「関吉の疎水溝讃歌」という歌も生まれました。下田町で専業農家だった玉利節さんが書いた詩をもとにしています。水の恵みをもたらす疎水溝への感謝が綴られた詩に感動した私は、このカフェで演奏会をしている小山さんに作曲をお願いしました。田園と疎水溝を流れる水の音に耳を澄ませてイメージを膨らませた、とても素敵な曲になりました。多くの人に聞いて、歌ってもらえたらうれしいです。

私ももう若くないので、そろそろ世代交代だと感じています。これからは、若い方々や学生さんが、この場所で自由に活動してくれたらと思います。そして、関吉の疎水溝とともにあるこの場所を、みんなの「心のふるさと」として残していってほしいです。

取材日：2025年5月25日 | 取材・記事作成：京田・山元

人々の営みを書く

「世界遺産を舞台に、ミステリーを書いていただけませんか。」

そんな依頼を鹿児島県と市からいただいたことが、この物語の始まりでした。

物語を書くにあたり、鹿児島にある構成資産を取材しました。最初に訪れたのが、小説『幽霊はどこへ行く』の舞台となった関吉の疎水溝でした。特に印象に残っているのは「稲音館」というカフェを訪れた時のことです。暑いでしょうと、店主の新森さんが麦茶とアイスキャンディーを出してくださいました。そのようなおもてなしにとっても心が温くなりました。カフェのデッキからは、一面に広がる田んぼと疎水溝の入口までを一気に見渡すことができ、そのロケーションも印象的でした。

私は長崎出身で、一人で東京に出てきているので、この景色にどこか懐かしさを覚え、郷愁に駆られました。そうして、小説ではこのカフェを舞台に物語を進めようと思ったのです。

実際に関吉の疎水溝を訪れると、自然豊かでとても美しい場所だと思いました。ただ、一目見て世界遺産であるというインパクトは伝わりにくいとも思いました。だからこそ、その歴史的価値を伝える人の存在が重要だと思います。案内して下さった市役所の方や専門家のように携わる人々が、その資産の背景や魅力を語ることで初めて、後世に残せるものになるのではないのでしょうか。作家という仕事をしている私にできることは、歴史ある場所を舞台にフィクションも絡めて、魅力を伝えることかなと思っています。多くの人々がその場所にまつわるエピソードを知ること、価値を実感できると信じています。

関吉の疎水溝のような遺産を守るということは、遺産そのものというより、そこに詰まっている先人の偉業や、人々の営みを未来に引き継いでいくことであると思います。これまで守ってこられた方々への感謝を忘れず、今後も良い形で保存されていくことを願っています。



佐藤 青南
作家

『幽霊はどこへ行く』の中でキーパーソンとして登場する新森さんについても触れておきたいと思います。カフェを訪れたとき、市役所の方々と楽しそうに会話されていて、このカフェが地元の人にとっての憩いの場であることが伝わってきました。新森さんは地域の人々をつなぐハブ的な役割を果たしているように感じ、実名で登場してもらいました。

一つの依頼から始まった物語ですが、関吉の疎水溝という場所の良さを少しでも多くの人に伝えたいと思って書きました。実際に足を運び、体感してもらえたらうれしいです。



下豊留 佳奈

郷土史家
オフィスいろは 代表

郷土を誇りに思える歴史 伝え続けたい

「鹿児島じゃ、何もできない」という声を聞きました。都会へ進学した友人が輝いて見えたこともありました。そんなとき、この鹿児島で同年代の若者たちが近代化を支えた事実を知りました。ふるさとが最先端だった。しかも頑張っていたのは、自分と年の変わらない人たちだった。生まれ育ったまちを、もっと誇りに思える気がしました。

志学館大学へ進学した私は、2013年9月に「若手会」の立ち上げに参加しました。当時は、鹿児島でもこの遺産のことがほとんど知られていない状態でした。これまで関心のなかった人にも興味を持ってほしいという思いで、まずは島津重豪の望遠鏡を親子で作ってもらいイベントを開催しました。その後も、史跡周辺の清掃活動を月に一度行いながら定期的に企画しました。例えば、2014年冬の「維新フォトラリー～世界遺産を目指して～」では、鹿児島市内の各史跡を巡ってもらえるよう、現地で写真を撮った方へ賞品をプレゼントしました。企画の成功には、参加したいと思ってもらえるような賞品が不可欠だったのですが、地元企業の皆さんが協力してくださいました。本当にありがたかったです。協賛企業の方からも、遺産の価値を初めて知ったという声を聞きました。世界遺産登録の審査が行われる際には、地元の人が保全に努めているかが重要な

ポイントだそうです。これまで歴史と関わりがなかった人を巻き込む中で、登録に向けた機運の高まりを感じました。

2015年7月、三つの構成資産の登録が決まりました。歓喜に湧く中、副市長が登録後の挨拶で「若い人が頑張ってくれた」と言われました。とてもうれしかったです。大学生生活を懸けた活動が実を結んだ瞬間でした。

2025年度から、かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議の会長に就任しました。この世界遺産は、私が歴史に携わるきっかけになりました。学生の頃に成長させてもらった経験を糧に、これに関わる人の輪を広げたいと思っています。この10年間で、遺産のことを知っている人の数はかなり増えました。しかし、すべての構成資産に足を運んだ人はまだ少ないです。

この遺産の価値は、外見を眺めるだけでは伝わりません。まずは鹿児島の人に、なぜこの場所が世界から認められたのか知ってもらい、県外から来た人へ説明できるようになってほしいです。世界に目を向けた先人がつづけた、23遺産の始まりのストーリーが鹿児島にあります。次の10年も、彼らを見習って挑戦し続けていきたいですね。

4 世界遺産の価値を伝える



東川 隆太郎

NPO 法人かごしま探検の会
代表理事

知ろう、つなごう、世界遺産

私が世界遺産に関わるようになったのは、まだ遺産が登録される前の時期でした。もともと「かごしま探検の会」というNPO法人で地域の歴史や文化の保存・継承に携わっており、まち歩きやバスツアーなどを通して地元の魅力を伝えることに力を入れてきました。

当時、県民の多くは西郷隆盛や大久保利通といった明治維新に貢献した人物には関心があっても、世界遺産の認知度はあまり高いとは言えませんでした。この二つの間に温度差を感じ、もっと世界遺産を身近に感じてほしいという思いから「みんなの集成館」をテーマにまち歩きやバスツアーを開催し、地域の人々に親しみを持ってもらえるような工夫を重ねてきました。その中で、徐々に遺産の認知度も上昇し、世界遺産登録に向けた気運が少しずつ高まっていくのを感じられたのは大きなやりがいでもありました。登録に向けた活動を振り返ってみると、自分自身も世界遺産について深掘りできたこともあり、楽しいと感じることばかりでした。いって言えば、世界遺産としての学術的な価値を認めってもらう過程で苦労した場面もありましたが、県域を越えた市民団体同士がつながる「九州伝承遺産ネットワーク」で互いに情報交換し合い、気軽に話ができる場があることに支えられました。

ここで皆さんに覚えておいてほしいことは、世界遺産は鹿児島だけのものではないということです。「明治日本の産業革命遺産」は8県11市に点在する23の構成資産で成り立っています。つまり23の資産が結びついて一つのストーリーが生まれるのです。2025年で世界遺産登録から10年が経ちました。私は次の10年に向けて「他の地域の遺産を知ること」が重要になると考えています。とはいえ、ただ知識として知るだけでは意味がありません。自分ごととして体験してもらう必要があります。そうして初めて、世界遺産の本当の価値が見えてくるのではないのでしょうか。

このような思いから、私は構成資産のある全国の地域で講演を行ってきました。現在は、小学校でも積極的に講演を行っています。10年後、20年後に講演を聞いた子どもたちが自ら遺産の価値に気づき、次の担い手になってくれるかもしれない—そんな希望を持って、活動を続けています。

このような地道な積み重ねがやがて全国をつなぐ光となり、世界遺産が「生きた物語」として受け継がれていくことを信じています。私自身も未来へと物語をつないでいくために、これからも歩みを止めずに活動を続けていきたいと思っています。



春山 亮

上町維新まちづくり
プロジェクト 代表

体験しよう！ かごしまの産業遺産

私が世界遺産に関わるきっかけとなったのは「かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議」の会長職を7年務めたことでした。旧集成館、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝からなるかごしまの近代化産業遺産をもっと多くの人に知ってもらい、その価値を次世代へ伝えていきたい。そのような思いから、産業遺産を生かす取組を模索する日々が始まりました。

パートナーシップ会議は、それぞれの団体が産業遺産に関する活動を行う際に情報発信の場を提供したり、課題を共有しながらアドバイスをを行ったりする調整役のような立場です。ただ、そのまとめ役としての仕事は決して簡単ではありませんでした。多様な立場の関係者と意見をすり合わせ、企画と遺産の意義をどのように結びつけるか考える場面では、苦労も多くありました。しかし、その分得られる成果も大きく「かごしまの産業遺産」という共通のテーマでさまざまな人とつながることができ、他団体の取組を知ることを通して学ぶことも多くありました。

このようなパートナーシップ会議での活動を通して、私は世界遺産を「過去の栄光をたたえる記念碑」ではなく「現代と融合した体験の場」として再構築することが必要だと感じています。とりわけ「明治日本の産業

革命遺産」の一翼を担うかごしまの近代化産業遺産は、日本の近代化を先導した地域の誇りであり、未来を拓くためのヒントにもなります。

今、こうした遺産を「保存」だけではなく「活用」という観点が強く求められています。単に施設などを見学して終わるのではなく、当時の人々がどのような志を持ち、どのように時代と向き合ってきたかを物語として体験することは、現代に生きる私たちの学びにもつながります。たとえば、歴史的な建物をギャラリーやカフェ、ミニシアターとして活用することは、その遺産の新しい魅力を引き出し、過去と現在をつなぐ「体験の場」を創出することになります。あわせて、日常的に人が集まり、写真や動画が自然にSNSで発信されるようなデザインと環境整備も重要です。景観を意識した空間づくりに加え、撮影スポットなどを整えることで、発信力のある「生きた遺産」としての役割を果たせるようになります。

このように、若い世代には遺産の「保存」ととどまらず、柔軟かつ主体的なまなざしでその価値を再解釈し、自分たちの言葉と感性で新たな活用の形を創り出してほしいと思っています。私はそれこそが過去から未来へのバトンになると信じています。



永山 恵子

NPO 法人地域サポート
よしのねぎぼうず

地域をつなぎ、歴史を語り継ぐ

私は、「マイタウンよしの」というミニコミ誌を10年間、2カ月毎に発行していました。吉野をもっと知りたくて、自分の知ったことを地域の人に届けたい、そんな思いを文字に綴り、吉野に眠る多くの魅力を掘り起こし、伝えることに喜びを感じてきました。

2003年は私にとって勉強の年でした。東京での全国地域リーダー養成講座に参加し、全国各地の志ある仲間たちと地域づくりを学びました。また鹿児島県の男女共同参画事業の一環として海外研修に参加。吉野で10年間ミニコミ誌を作成して見えてきた地域の課題を深く考える機会になりました。

その経験を生かし、2005年にNPO法人「地域サポートよしのねぎぼうず」を立ち上げました。現在は地域福祉や防犯、子どもの育成など、暮らしに関わる幅広い支援活動に取り組んでいます。地域は教育や環境、福祉といった個別の分野だけではなく、すべてが結びついて地域を形作っている。だからこそ、総合的に支える仕組みが必要だと考えています。

2015年、吉野に所在する文化遺産が世界遺産「明治日本の産業革命遺産」として登録されました。そのとき、「世界遺産が吉野に“降ってきた”」と感じたのを覚えています。私たちの地域に世界的な価値がある

遺産。それをどう生かしていけばよいのか、わくわくドキドキしました。

そこで始めたのが、地域の大人による学びの場「わいわい風呂敷会」です。歴史に詳しい方も交えながら、地域の物語を知り、語れるようになろうと取り組んできました。また、吉野地域の中学校と協力し、生徒によるパネルガイド活動も始めました。子どもたちが地域の歴史を学び、伝えることで、地域と自身を深くつなぐ機会になっていると感じています。

誰かが言いました、「歴史はロマンだ」と。最初はよく分かりませんでしたが、今は分かる気がします。歴史とは、目には見えないものを想像し語り継いでいくこと。人と人とのつながり、思い、暮らしの背景にある物語を感じ取ること。その積み重ねこそが、地域の未来の力になるのだと思います。

地域のつながりが希薄になる中で、子どもたちの育成と分断する地域社会の再構築が課題です。だからこそ、地域と関わる経験を小さいうちから持つことが大切です。語ることは、記憶をつなぎ、地域をつなぐ力になります。私は吉野という地域に魅せられ、素敵な資源や人を線でつないで面にし、パッチワークにしてみました。次はその布を未来へと広げていきたいですね。

4 世界遺産の価値を伝える



久保 英司

鹿児島ぶらりまち歩き
かごしまボランティアガイドの会

まち歩きガイドが語る歴史と未来への継承

私は鹿児島市観光企画課長だった 2005 年に「鹿児島ぶらりまち歩き」を企画し、2008 年の開始からボランティアガイドとして活動しています。2025 年で 18 年目を迎えますが、鹿児島市に点在する歴史や文化、自然の魅力を、観光客はもちろん市民の皆様にも伝えることを目的としています。鹿児島は幕末や明治維新のイメージが強いですが、島津 700 年の歴史の中で、鎌倉時代から現代まで多くの出来事があり、たくさんの人物が活躍してきました。そうした埋もれた歴史や文化を紹介したいと思い、この活動を始めました。

印象に残っているのは、札幌時計台が西南戦争をきっかけに建設されたエピソードです。テレビ番組で知ったのですが、北海道と鹿児島がそんな形でつながっていたとは思いませんでした。クラーク博士が自身の南北戦争の教訓から札幌農学校に演武場の建設を提案し、後に鹿児島出身の黒田清隆が時計塔を増設し、今日、時計台と呼ばれるようになったそうです。その話を知って感動し、ガイドとしての大きなモチベーションになりました。北海道を再訪し、資料館で学び直したこともよい思い出です。

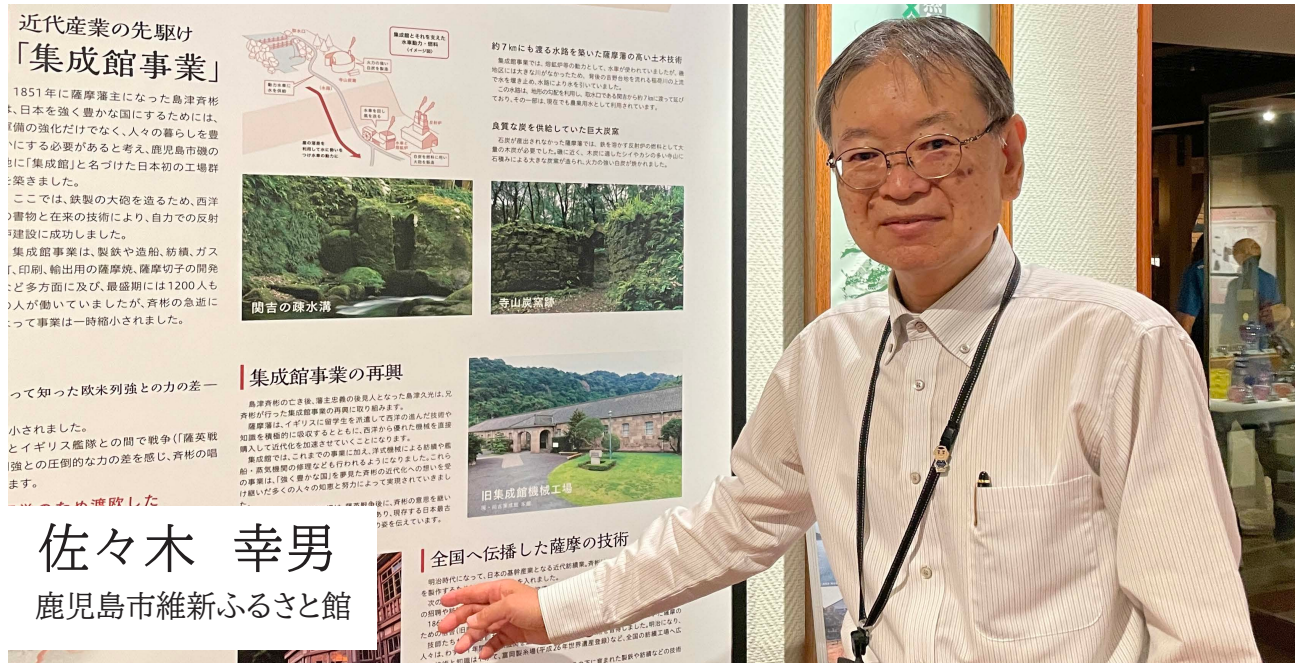
「鹿児島ぶらりまち歩き」は観光客だけでなく、市内の小中学生の校外学習や企業の新人研修でも活用さ

れています。特に最近では、金融機関など多くの団体にご参加いただき、歴史を学ぶだけでなく、平和や防災の大切さに気付く機会となっています。参加者がそれぞれに学びを得ることを願っています。

2015 年に「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録された際には、鹿児島市企画財政局長としてドイツ・ボンでその瞬間に立ち会いました。これらの遺産には、派手さはありませんが、日本の重工業の発展を支えた重要な歴史があります。その価値を伝えるには、写真やイラストなども活用し、丁寧に背景を伝えることが大切だと感じています。

ボランティアガイドは、情報収集を行い、さまざまなエピソードを交えながらお客様と交流しています。このコミュニケーションも大きな魅力です。しかし、課題はガイドの高齢化です。私も活動開始時は 50 代前半でしたが、2025 年で 70 歳になります。今後、鹿児島の歴史と文化を次世代に引き継ぎ、発展させるために、若い方々にもぜひこの活動に参加していただきたいと願っています。ガイドを通して、人と人、人とまちをつなぐ架け橋となれることを、心からうれしく思っています。これからも「伝える」ことの楽しさと大切さを胸に、活動が続けていきたいと考えています。

4 世界遺産の価値を伝える



未来へ残すという使命

私は小学校の教員から鹿児島市教育委員会の文化課（当時）に異動となり、2005年から「明治日本の産業革命遺産」に関わり始めました。世界遺産登録には国指定の強い保護が求められ、旧集成館、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館（異人館）はすでに国指定でしたが、関吉の疎水溝・寺山炭窯跡は市指定だったため、まずは国指定を目指す活動を始めました。文化庁との協議、調査や発掘、土地所有者の同意など、法的・技術的対応が膨大に必要で、丁寧に積み上げていく作業でした。さらに異人館は、二度移築されており、本来の位置を探す調査も行われました。価値の完全性・真実性を担保するためには元の場所を把握することが大切だからです。市役所内では各部局との調整や勉強会に奔走し、関係機関との交渉・調整業務もありました。

文化財の保護を担当する職員は当初人数が少なく、世界遺産の仕事まで担うのは大変な部分もありました。しかし、世界遺産に登録されれば、記録保存ではなく、本来あるべき姿を未来永劫保存できるため、文化財の仕事に携わる者として本来やりたかった仕事でもありました。また登録によって、鹿児島市の魅力が増し、文化財保護に割ける予算も増えると考え、「市と市の文化財のためにがんばるぞ！」という気持ちで仕事に取

り組みました。私はこの間、ゼロ予算の広報活動も行いました。自作のロゴマークを名刺や年賀状などに印刷、配布し、地道に世界遺産の認知を広めました。

登録後は、その価値を分かりやすく伝えていくことを目標にしました。最後の勤務地は、関吉の疎水溝を校区にもつ川上小学校でした。同校で特別講師として世界遺産授業を行い、退職後の今も毎年出前授業を行っています。維新ふるさと館でも、体験コーナーやギャラリーガイドを設けることで、楽しみながらその価値に気付いてもらう工夫を行っています。

鹿児島の近代化の歴史は私たちの誇りです。例えば蒸気機関の開発では、オランダ語の書物だけを頼りに、鹿児島の技術者たちが7年かけて一から作り上げました。日本にはその機械を作る工作機械すらなかった中、手作業で完成させたのです。実際には「2割程度の出力しかなかった」とオランダ人技術者は記録しましたが、同時に「見たこともない機械を、簡単な図面から作り上げた日本人の能力に感嘆せざるを得ない」と称賛しています。このような先人の挑戦と努力の歴史を誇りに思い、くじけそうな時こそ思い出してほしい。そしてその証としての世界遺産を未来世代へと大切に継承していきたいのです。

取材日：2025年6月8日 | 取材・記事作成：京田・菰尾

4 世界遺産の価値を伝える



松田 忠大

鹿児島大学法文学部 教授
「鹿児島の近現代」教育研究センター

地域通訳案内士「ガイド」する力育てる

ガイドさんのように、分かりやすく知識を伝える。これって案外、難しい作業なんです。情報を他者へ伝達するためには、相手の存在を認識した上で、物事をより深く理解し、伝えたいことを整理する必要があります。このような能力は今後、あらゆる場面で重視されるはずです。私の目標の一つは、「ガイド」する能力を大学で養えるような仕組みを整えることです。

現在、鹿児島大学大学院の人文社会科学部研究科では「鹿児島県世界文化遺産地域通訳案内士」を育成する科目を開講しています。地域通訳案内士は、海外から日本へ訪れた観光客の方々に対して、地域を外国語で案内する資格です。この資格を有している人は、特定の地域において、報酬を得てガイドを行うことができます。資格の認定方法は自治体によっても異なりますが、鹿児島県では本学の大学院が開講している科目の修得が育成研修として定められています。講義には、英国・ロンドン市でガイドとして公認された経験をお持ちの前園晃慶先生をはじめ、多くの専門家が関わっています。

地域通訳案内士には、「明治日本の産業革命遺産」や鹿児島に関する知識だけではなく、海外の習慣・マナーへの理解や怪我への対応能力、保険の知識なども

求められます。法律で定められた専門性の高い資格ということもあり、認定までには授業料、検定料、登録料をすべて含めて7万円近い経費を負担していただかなければなりません。それにもかかわらず、去年は29名もの一般の方々が受講してくださいました。年齢層も、30代から70代までと幅広かったです。決して安いとはいえないお金を払ってでも、これだけ多くの方が鹿児島の良いところを世界へ伝えたいと手を挙げてくださっている。一人の鹿児島県民として、とてもうれしかったです。

ちなみに、私自身の専門分野は商法で、鹿児島大学では法学を教えています。構成資産との関係はほとんどなかったのですが、縁あって現在、大学院で開講されているこの科目の受講を希望する方を支援するべく、受講・出願の窓口を務めています。

また、私が所属する法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターは、2022年の創設以降、トークイベントやシンポジウムを継続的に開催してきました。今後も、地域の魅力に触れられるような仕掛けづくりに関わっていく予定です。今後も、この鹿児島に根を張って、人材の育成に取り組んでいきます。

世界遺産を体験する

鹿児島市教育委員会文化財課

世界遺産を知り、訪れ、体験しましょう。鹿児島の歴史を身近に感じてください。

旧集成館

曲水宴（島）

- 尚古集成館講座（島）
※年数回開催

五月幟展示（島）

綿花の種植え体験（文）

-

島津家の七夕飾り（島）

斉彬の愛した朝顔展（島）

-

綿花の綿摘み体験・
機織り体験（文）

- 異人館で育てた綿花から種を取り、糸を紡ぎ、機織りをします（10月上旬開催）



かるかん奉納祭（島）

菊まつり（島）

-

草鹿式（島）

大門松（島）

-

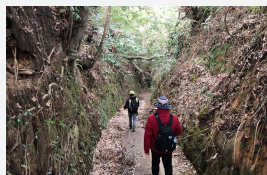
愛猫長寿祈願祭（2/22）（島）

薩摩のひなまつり（島）

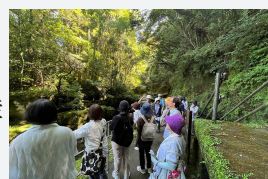
-

寺山炭窯跡

よしの兵六
歴史街道ウォーキング（吉）
吉野の史跡を見ながら、兵六の化かされた歴史ロード（旧東目筋街道）約18キロメートルを歩きます（春開催）

世界遺産・ジオパーク
バスツアー（世）

歴史とジオの視点から3構成資産を満喫するバスツアー
（8～12月開催）



吉野兵六ゆめまつり（吉）

寺山おタカラ発見（11/23）（吉）

寺山散策、花炭づくり、心岳寺詣りなどの体験活動、歴史パネルガイドなどの発表活動が行われます



関吉の疎水溝

関吉ニコニコ
ウォーキング（稲）
※毎月第3水曜日開催

-

-

-

-

-

-

-

-

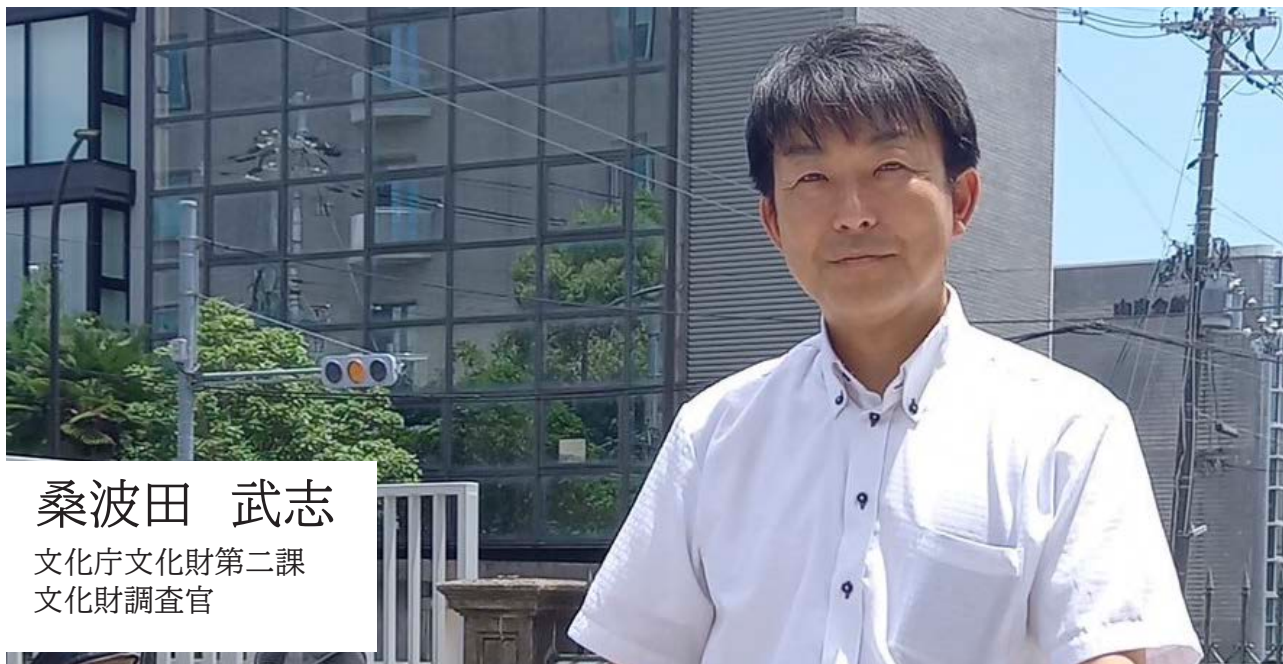
-

-

-

-

●定期開催 | （主催機関）：島（島津興業）、文（鹿児島市教育委員会文化財課）、世（鹿児島市観光交流局世界遺産・ジオ・ツーリズム推進課）、吉（吉野兵六会）、稲（稲音会） | 詳細は各主催機関におたずねください | 写真提供：鹿児島市教育委員会文化財課、鹿児島市観光交流局世界遺産・ジオ・ツーリズム推進課



桑波田 武志

文化庁文化財第二課
文化財調査官

鹿児島・世界の「宝」を分かりやすく伝える

私が世界遺産に関わるきっかけとなったのは、2006年に鹿児島県で世界遺産を目指すためのプロジェクトが始動したときでした。文化財課にいた私に声がかかり、知事部局に異動することになりました。はじめは世界遺産の構想は何もなく、手探りの状態でした。当時の伊藤知事が九州地方の知事会で登録に向けての提案をし、鹿児島県が事務局になりました。しかし、九州各県に説明にいっても、登録に賛同してもらえる自治体は少なかったです。この世界遺産はストーリー性をもって初めて価値があるとされるため、登録には鹿児島県単体だけではなく、各地域との連携が欠かせません。また、世界遺産の登録に向けたプロセスも複雑で、地方から国、国からUNESCOへと推薦書の提出が必要でした。提出後、ICOMOSの現地調査が入り、「書いてあることは本当か」という観点で調査が行われました。その対応に、特に神経を使った記憶があります。その一方、実際に世界遺産として認められた際の達成感は大きく、今でもその経験が生かされています。

あと10年ほどで退職なので、最後にひと仕事しようと思い、2023年度からはちょうどお声かけのあった文化庁に行く決意をしました。今は埋蔵文化財の保護に

関する講習会を開催し、全国の担当職員と協力して文化財の保存に努めています。

私がこの仕事をしていてやりがいを感じるのは、「自分が歴史を未来へつなぐ役割を果たしている」と実感できる瞬間です。歴史に埋もれていた資料を発掘し、それが文化財として保存されたときや、その遺産の価値を地域に分かりやすく説明し、広め、後世に伝えるための活動をしているときです。

世界遺産登録はゴールではなく、登録されてからがスタートです。登録に関わった人々は遺産の価値を理解していますが、世界遺産があるのが当たり前となった世代—行政職員も含めてですが—が保全・活用を担う時代には、本県だけではなく、ほかの地域の遺産群の価値も理解する必要があります。学術的に価値があると伝えるだけでは一般の人たちには重要性がはつきりと伝わらず、人々の遺産に対する愛着もわからず、保全・活用の持続可能性が欠けてしまいます。そのため、「遺産の価値を分かりやすく伝える」こと。これが大切ですし、登録までのストーリーも含めて世界遺産であると考えています。今の日本の原動力となる日本・世界の「宝」がここ鹿児島にあることの意味を、この先の遺産に関わる人々には意識してほしいと思います。

5 世界遺産の価値をみがく



本中 眞

奈良文化財研究所 所長
集成館地区整備活用専門家委員会委員

世界遺産の保全と新たな価値創造

「明治日本の産業革命遺産」がドイツのボンで世界遺産に登録された直後、私は内閣官房の職員となりました。内閣官房は産業遺産の世界遺産への登録推進を担当する官庁で、産業遺産の保全のための政策も担っていました。特に私は、登録後に課題として残された遺産の保全のための政策を進める任務を担うこととなったのです。

世界遺産に登録されたとき、世界遺産委員会から8項目にわたる勧告が出ました。それは、準備にかなり時間と労力を要する難問揃いの宿題でした。登録から3年後の2018年の世界遺産委員会で審査できるよう、2年4カ月という短期間でレポートを完成させなければなりませんでした。

「明治日本の産業革命遺産」は、日本列島の8つの地区に分散して存在しています。それらの保全に中核的な役割を果たすのは、各構成資産の所有者や自治体などです。対応部局は自治体ごとに異なり、担当者や行政がいったいどのように勧告に応え、レポートを作ったらよいのかまったく見当もつかないという状況でした。必要なことは、宿題の全体を統括的に見渡し、一つの方向を示すことでした。私は11サイトのそれぞれの立地や特質を大切にしつつ、一つのレポートにまと

める「舵取り役」を担ったのです。

明治期の産業遺産の多くが、世界遺産になれるわけではありません。世界遺産の構成資産を持つ地域には、産業遺産の保全や活かし方の“リーディングヒッター”としての責任があります。特に鹿児島県の集成館地区では、周辺環境に配慮した保全の施策が進みつつあることに注目すべきでしょう。行政を担っている人たちはもちろん、地域や企業の人たちも、「世界の宝」となったことを誇りにして、周辺の森や町並みを大切にする施策に取り組んで来られました。

文化財は、先人が土地に残した履歴であり、歴史を語る証拠です。先人たちのメッセージを正確に読み取り、現代に生きる私たちの生活にも生かす視点が大切です。文化遺産だから「触ってはいけない」場所なのではなく、文化遺産だからこそ新たな価値を生み出していける場所であってほしい。私たちが今を幸せに生きるうえで、遺産が語る文脈を踏まえつつ、さまざまなイベントや取組を通じて新たな創造活動の輪が広がっていくことを大いに期待しています。特に、若い人たちの豊かな感性に期待したいと思います。

5 世界遺産の価値をみかく



渡辺 芳郎

鹿児島大学法文学部 教授
集成館地区整備活用専門家委員会委員

世界遺産登録というスタートライン

私が「明治日本の産業革命遺産」に関わるようになったのは、2002年度からの科学研究費補助金による大規模プロジェクト「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査研究」への参加がきっかけでした。その中で鹿児島の集成館に関わる調査を実施することになり、2003年から3回にわたって熔鉱炉跡の発掘調査を行い、報告書としてまとめたことが私の集成館研究の出発点です。

当初は集成館単体が注目されていたものの、やがてそれを世界遺産にしようという動きが生まれ、2008年に世界遺産登録推進協議会が設置され、その活動が本格化しました。私は考古学が専門なので、主に学術的側面からサポートしました。例えば磯窯の研究や反射炉の実態検証などを通して、これまで文献のみで語られてきた内容を物的資料や同時代史料に基づいて再検討を試みました。

2015年に世界遺産として正式に登録された後、地域社会や関係者の反応は非常に前向きでした。しかし、登録はゴールではなくあくまで新たなスタートであり、その後も継続的な調査や研究の重要性が強く認識されています。

例えば、大雨による磯庭園の石垣崩落や仙巖園駅

の建設工事に伴う発掘調査などを通して新たな資料が発見されるなど、登録後の成果も多く存在しています。これをどのように活用し、新たな発信コンテンツとして育てていくかが今後の課題となるでしょう。今手元にあるものだけを使っての情報発信の繰り返しだけでは限界があります。リピーターを引き込むためにも、新しい知見を生み続ける努力が欠かせません。

また、地震や豪雨などの自然災害が頻発する現代において、文化遺産を「守る」という姿勢はこれまで以上に重要性を増しています。歴史的建造物や貴重な資料は必ずしも永遠に残るものではなく、時の経過や災害によって、つねに損傷や消失のリスクに直面しています。そして、それらをどのように保全し、いかにして後世に継承していくかは、現代に生きる私たち一人一人の意志と選択にかかっているのです。だからこそ、これからを担う皆さんには「文化を守る責任」と「歴史を伝える使命」を強く自覚し、主体的に関わっていく姿勢を持ってほしいと思います。今後の10年、100年に向けて、これまで積み重ねてきた学術的・文化的成果をさらに発展させ、新たな世代がそれを継承し続けることを期待しています。

取材日：2025年5月21日 | 取材・記事作成：上川路・出羽



酒匂 一成

鹿児島大学工学部 教授
地域防災教育研究センター

文化財の復旧に人の「思い」を

私が鹿児島の世界遺産に関わるようになったのは、2019年の寺山炭窯跡の調査に技術的な協力をしたのがきっかけでした。文化財自体には2004年から関わりを持っており、京都の清水寺や熊本県人吉市の人吉城などで斜面崩壊から神社・仏閣を保全するための防災システムの実証実験や斜面防災対策技術の開発に取り組んできました。

文化財の復旧に際しては、普通の場所の復旧とは異なり景観や植生に気をつける必要があります。例えば、斜面が崩壊した場所を復旧する際に、崩れたところをコンクリートで固めたり、そこには自生していなかった植物を植えたりすると、その場所の景観が損なわれてしまいます。文化財は多くの人の思いが積み重なってできているので、災害を受けた際に、できるだけ元通りに戻せるかが重要となってきます。その際には、みんながどこに価値を見出しているのかを考え、その価値は残しつつ、ちょっとずつ災害に強くしていくことが大事だと思っています。

寺山炭窯跡では、鹿児島市教育委員会の協力のもと、調査を行ったり、炭窯跡の石積崩落要因に関わる意見交換会に参加したりしました。そこでは、なぜ石積が崩れたのか原因を考え、崩れないように対策したあと

にどのように景観を保つのかの検討を行いました。

私は寺山炭窯跡の近くで育ち、小中学生の頃は遠足で遊んでいて、歴史のある公園くらいに考えていました。しかし、世界遺産に登録されてから、看板が立ったり駐車場ができたりと、地元の人たちが文化財を大事に育てようという機運が高まってきたことにより、ありがたみが分かった気がします。また、寺山炭窯跡は大雨の被害を受けてしまいましたが、鹿児島市教育委員会が中心となって、地元の方と一緒に復旧していく形が採用されています。復旧は専門業者が実施すれば一瞬ですが、子どもたちと一緒に斜面の復旧を行ったり、炭窯跡復旧の途中経過を地元の人に公開したりすることで、文化財を守ろうという機運がさらに高まる良い機会となっていると思います。

文化財に限らず、みんながきれいだと思うところには人の手が入っています。その人たちがなぜそれを残したかったのかを引き継いでいかないと、いつかは廃れてしまいます。そのため、被災することがあっても、今生きている人が後世にどのように残そうとしてきたかに思いをはせて、その「思い」を引き継いでいってほしいです。



加世田 尊

鹿児島県観光・文化スポーツ部文化振興課
世界文化遺産室世界文化遺産係

郷土愛をはぐくみ、先人の想いを次世代に

私が世界遺産に関わるようになったきっかけは、2022年に世界遺産協議会の事務局を担当し始めてからです。この事務局は私の所属する世界文化遺産室の業務の一環でもあります。事務局では鹿児島県を含む8県11市と連携を取り、情報発信や保全業務を進めています。また、県の取組として、県民に遺産の価値を伝え、保全意識を高めることを目的としたシンポジウムを登録以後毎年開催しています。その他の取組として、県内構成資産と鹿児島の観光スポットなどをあわせて紹介する鹿児島県観光サイトの特集ページ「かごしまの『明治日本の産業革命遺産』にふれる旅」による情報発信やまち歩きを開催するなど、遺産の魅力を知ってもらう取組を行っています。

2024年度からはSNSにも力を入れ、特に若い世代へのアプローチにInstagramを活用しています。その一環として、2025年7月8日に登録10周年の節目を迎えたことから、県内構成資産の写真や動画の投稿を促し、本遺産の認知度向上などを図る「Instagram投稿キャンペーン」を実施しています。また、世界遺産協議会でも10周年記念事業としてカードラリーなどを実施しておりますので、ぜひ各構成資産を訪れていただけたらと思います。

今の職場に異動する前は、県立埋蔵文化財センター、

（公財）埋蔵文化財調査センターでそれぞれ発掘調査中心の業務でしたが、異動してからは業務に関する資料作成や関係機関との調整などのデスクワークが中心となり、さらには「インタープリテーション」などの専門用語を勉強するなど戸惑った記憶があります。

鹿児島県内の構成資産の認知度には偏りがあり、遺産の価値を理解するのも難しいという課題もあります。この職について気付いたこととして、遺産の価値をより分かりやすく伝えるためには、専門家と一般の方の視点の違いを理解し、分かりやすい言葉や身近なもので例えるなどの話し方の工夫が重要ということです。歴史の継承は単なる過去の記録ではなく、地域の誇り（郷土愛）を育む重要な要素です。日本の近代化の始まりを後世へ伝え、先人の努力を次世代へと受け継ぐためには、本遺産のストーリーを十分に理解してもらう必要があります。吉野中学校や吉野東中学校のように地域全体で遺産への意識を高める機会として、鹿児島市外でのシンポジウム開催も方法の一つと考えています。

この先の10年を見据えると、特に若い世代への継承が課題に挙げられ、幼少期から遺産に触れる機会を増やすことが必要です。郷土愛を持って歴史を守り、未来へと受け継ぐ人を増やすこと。これこそが私の使命であり、その実現に向けて日々業務を続けています。

取材日：2025年5月27日 | 取材・記事作成：山本・住吉

5 世界遺産の価値をみがく



次の世代へ「つなぐ」思いで

鹿児島市世界遺産・ジオ・ツーリズム推進課は世界遺産の観光活用を中心に取り組んでいます。かごしま近代化産業遺産パートナーシップ会議をはじめ、県や民間の団体の方々と連携しながら世界遺産に関わるイベントや事業を実施してきました。立場や背景の異なる方々と協働する中で、さまざまな視点や意見に触れることが多く、新たな地域の魅力に気付くことができ、人とのつながりの大切さを実感する貴重な機会にもなっています。

特に印象に残っているのは、2025年3月15日に開催された仙巖園駅開業イベントです。これまではそれぞれに別々のイベントを行ってきましたが、このときは日ごろ「明治日本の産業革命遺産」に携わってきた皆さんと一つの目標に向かって団結し、イベントを開催するとても貴重な経験となりました。

世界遺産に登録されてから10年。実際のところ「鹿児島に世界遺産がある」ことを知らない人も多いのが現状です。イベントに足を運んでくださるのは、若い方に比べて、年齢層の高い方が中心となっています。だからこそ、次の10年は若い方々にもっと関心を持ってもらいたいという思いが強くなってきています。そのために、専門的な内容に偏るのではなく、誰もが気軽

に参加できるような事業を心がけ、学生の参加を促すためのPRなどもしています。若い世代の方々に自分たちの暮らす地域の価値や歴史について、少しでも知ってもらい、次の世代へと「つなぐ」思いを持って、世界遺産に関わってもらえたらと願っています。

ただ、8県11市にまたがる広域の遺産ということもあり、その全体像を伝えることには難しさもあります。見た目にインパクトがある遺産ではなく、背景にある歴史や技術の積み重ねに価値があるため、その魅力をどう伝えていくかは常に大きな課題です。また、鹿児島県内には三つの構成資産がありますが、それらをすべて訪れた方は、意外と少ないのが現状です。しかし、三つを巡ることで初めて気付く魅力が数多くあります。だからこそ、「全部訪れてみよう」と思ってもらえるような仕掛けや取組を、これからも工夫して続けていきたいと思っています。そして何より、世界遺産登録前から地道に活動을続けてこられた方々が、登録を機にさらに意欲を高めて取り組んでおられる姿はとても心強いものです。その思いを受け継ぎながら、私たちも次の10年に向けて前進していきたいと思っています。

5 世界遺産の価値をみかく



藤井 大祐

鹿児島市教育委員会
文化財課世界遺産保全係

小さな活動が世界遺産をつなぐ

世界遺産「明治日本の産業革命遺産」のうち、鹿児島市には旧集成館、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝の三つの構成資産があります。私の仕事は、世界遺産エリアで工事などの事業を計画している方と一緒に、その行為が世界遺産の価値にどう影響するかを考え、必要な法令の手続きについて関係機関と調整することです。事業者と国、県、そして地域の方々との間に立って調整する橋渡しのような役割です。

工事が始まると現場に立ち会うことも仕事の一つです。旧集成館は日中の交通量が多い場所にあるので、工事は夜間に行われることが多いです。世界遺産を守るということは、書類のやりとりだけで完結するものではなく、現場に身を置いて予期せぬことにも備えることが必要です。

寺山炭窯跡では2019年に土砂崩れの被害があり、その復旧作業にも携わりました。復旧作業では地域の方々や小中学生にもご協力いただきました。その一つがどんぐり苗の植樹です。寺山でかつて焼いていた白炭の材料がシイ、カシ類などのどんぐりの木です。つまり、あの場所にはどんぐりの森が広がっていたのです。どんぐり苗を植えることは、かつての環境、世界遺産としての森を取り戻すという意味もあると考えました。

この活動は、コロナ禍ということもあり、市民の皆さんや地域の子どもたちとの小規模な勉強会とどんぐり拾いから始まりました。参加者の中には、災害の背景に注目し、「世界遺産と気候変動」をテーマにしたパネル発表をしてくれるようになった中学生グループや、のちに高校生になって世界遺産の再生と地域のつながりについて自分で調べ、小論文にまとめてくれた方もいます。災害というきっかけではありましたが、復旧を通して地域と世界遺産の関係が深まり、未来への橋がかかったようにも思えました。

世界遺産は、歴史的に価値があり大切に守るべきものですが、それだけではありません。人と人をつなぎ、対話を生み、さらには世界遺産の現場で起こった出来事を通して、現代社会が直面している課題や問題について考えるきっかけを与えてくれる存在でもあると私は感じるようになりました。

世界遺産を取り巻く環境は、年々厳しさを増していくでしょう。それでも、先人たちの思いを将来につなぐためには、保全と活用を両立させることが重要です。世界遺産の価値や重要性に触れる機会を通じて、この遺産をどう守り、どう伝えていくかを一緒に考え、活動してみませんか？

世界遺産とまちづくり —普遍的価値の追求—

木方 十根

(鹿児島大学工学部教授／集成館地区整備活用専門家委員会委員)

いまや文化遺産の保存と活用は、「まちづくり」の基本的な手法の一つとして定着している、とさえ言われます(註1)。文化遺産を通して多くの人が地域の良さを知り、それらを保存・活用することで人々の文化生活は豊かになり、豊かさは誇りとして次世代へと引き継がれます。こうしたまちや地域の姿は確かに理想的です。そしてわたしたちのまち・鹿児島には世界文化遺産があります。実際その登録前から登録後の10年間に多くの人が貴重な文化遺産に関わり、保存・活用を通じたまちづくりが確実に歩みはじめました。一市民として誇らしいと感じますし、世界遺産に関わってきた者としても感慨深いものがあります。

一方で、何となく気の抜けない、漠然とした不安、緊張感が解けないような違和感が残っています。そう感じるのは私だけなのでしょうか。2025年7月、世界文化遺産登録10周年記念という晴れがましい節目を迎えている今、あえてこの違和感について考えてみたいと思います。

違和感の要因として思い至るのは、「世界遺産」と「まちづくり」、ともに、とても大きな概念である、ということです。言い方を変えれば、抽象的、多面的で捉えどころのない、あるいは意味そのものを考え続けなければならない概念だ、ということです。

まず「世界遺産」について考えてみましょう。世界遺産とはユネスコが定めた「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(通称：世界遺産条約、1972年)に基づく「人類共通の遺産」のことです。世界遺産に登録されるには、いくつかの項目において顕著な普遍的価値(Outstanding Universal Value)を持つと認められ、その真正性(Authenticity)と完全性(Integrity)を保護・管理する体制が条約締結国の国内法において確保さ

れていることが条件となります。普遍的(Universal)が意味するところは「世界の人々にとって」という意味とともに「時や場所を超えた真実や正しさ(註2)」という意味もあります。私たちは貴重な文化遺産とともに、それが伝えるべきこのように高邁な理念を理解し、守り、継承していかなければならないのです。

ところが国際情勢は、多分に分断を伴いながら大きく変動しそうな予兆を見せています。自国第一主義の台頭とともに国際協調主義の後退が懸念されています。また過去を振り返れば、主に紛争地域で偏狭な考え方から世界遺産が傷つけられ、破壊される事態が発生してきました。こうした状況を考えると、今後ますます世界遺産を守るという理念の重要性は増し、その真価が問われるものと思われます。そこでは文化遺産を破壊や滅失から守るばかりでなく、保存・活用にあたって、一部の人々にとっての歴史や、特定の立場からのものの見方、そういったものに偏らない普遍的理解と語りをつねに追求していかなければなりません。なかでも産業遺産については、人類史のなかで環境や人権に与えてきた負の側面にどう向き合うのか、が問われます。また活用の場面では、来訪者によって引き起こされる観光公害(オーバーツーリズム)という問題も顕在化しています。世界中から集まる観光客とコミュニケーションをとり、お互いの文化を尊重しながら共存するための努力と工夫が重要ですが、このところ社会全体の冷静さが試されるような状況になっています。

世界遺産を保存・活用する取組には、高い精神性が保たれる必要があるのです。しかし、社会情勢をみるに、これから先、そのためには、意識的な努力が必要となってくるように思われます。

次に「まちづくり」を検討してみましょう。都市計画学者の渡辺俊一は、①主体、②空間、③時間、④目的、

⑤方法、⑥分野、の六つの次元で規定される論理構造として、「まちづくり定義」の論点を整理しました（註3）。鹿児島における世界文化遺産をめぐるのは、さまざまな立場の人々（①主体）が、磯、寺山（吉野）、関吉（下田）の三つの地区を中心に取組を進めてきました。特筆すべきは、単に建造物や史跡といった有形文化遺産の保存・活用ばかりでなく、寺山の森の再生など、文化遺産周辺へと②空間、⑤方法、⑥分野を大きく拡大しながら取組が進んでいることです。またすべての取組の前提には③時間、④目的、の点で、「未来」に向け「世界遺産としての価値を伝えること」、という共通理解があります。このようにみれば、すでに立派に「まちづくり」が展開しているといえます。今後はさらに②空間、⑤方法、⑥分野を、保存と活用という観点から深掘りしていく形の展開が望まれます。

いくつか考えられる課題を挙げてみましょう。ハード面での課題の一つが文化遺産に使われている溶結凝灰岩の問題です。文化遺産の保存では真正性の確保の観点から当初材を最大限に保全することが求められますが、溶結凝灰岩は風化や塩害で劣化します（写真1）。文化遺産の保存のために、交換部材の持続的確保が緊急の課題となっています。ところが現行建築法規の下、石材は構造部材として用いられなくなって久しく、かつては集落の周辺に存在していた石切場は使われなくなり、その場所を知る人も少なくなっています。当然切り出しを行う職人も居なくなっています。このままでは当初材とは似て非なる石材で文化遺産を修理せざるを得なくなる日が遠からずやってきます。地質学や材料工学といった学術的研究（⑥分野）、先進的な測定・分析と、聞き取りなどの人文社会科学的な調査を組み合わせ（⑤方法）、九州南部などで幅広く（②空間）取り組むべき課題ですが、①主体としての研究

者や専門技術者の力だけでは足りず、地域住民や産業界の参画を巻き込んだまちづくりとしての取組が必要です。

継続的な課題としては世界文化遺産周辺の景観保全、とくに下田地区の田園景観（写真2）、寺山の森林景観の保全の体系化が挙げられます。それぞれすでに住民や学校など（①主体）の取組が進んでいます。取組を位置付け支援する制度面の整備（⑤方法）、具体的には景観法上の景観計画の個別・特化が望まれます。そのほか、集成館事業に関連する産業遺産、例えば奄美の製糖工場跡や山ヶ野・芹ヶ野金山関連史跡などの保存・活用も、世界文化遺産を活かした広域的まちづくりの継続課題として重要です。ここではネットワーク強化（⑤方法）が必要となります。このように、これからのまちづくりでは方法論的な展開が期待されるところです。

私は、世界遺産の保存・活用とまちづくりが、ゆっくりと自然体で、しかし深い思考を伴って、進んでいくことを期待しています。鹿児島の世界文化遺産にはいつも新しい発見があります。世相が変わっても、世界文化遺産を通して学び、「普遍的価値」を万人と共有できる鹿児島であってほしいものです。

（写真提供：木方十根）

註

1 大河直躬・三船康道編著『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり<改訂版>』、学芸出版社、2015。

2 true or right at all times and in all places,『オックスフォード現代英英辞典』、第7版、Oxford Univ. Press, 2005

3 渡辺俊一、「[まちづくり定義]の論理構造」、『都市計画論文集』Vol. 46, No.3, pp.673-678, 日本都市計画学会, 2011.10.



写真1 溶結凝灰岩の劣化



写真2 下田町の田園風景

舞台裏

記念インタビュー誌制作プロジェクト



チーム Firebricks

鹿児島大学法文学部 学生有志

託された思い、未来に届ける

私たちは世界遺産登録 10 周年記念事業の理念や活動内容に関心を持った鹿児島大学法文学部の学生有志です。活動に参加した動機は、地元のことを知りたい、鹿児島の歴史に興味がある、大学生のうちに挑戦したい、世界遺産に関わる人々の思いを知りたい、将来は文化財に関わる職業に就きたいなど、メンバーそれぞれです。2024 年 6 月に記念インタビュー誌制作の方針が決定し、準備期間を経て、2024 年 12 月から活動を開始しました。

インタビューは 2 ～ 3 人のグループで実施しました。インタビュー対象者に連絡して日程調整し、直接お会いしてお話を聞きました。遠方にお住まいの場合はオンラインでインタビューを行いました。インタビューは 30 分程度が目安でしたが、話がはずんで 2 時間ほどかかることもありました。大学生の訪問を喜んでくださり、逆に取材されることもありました。

インタビュー終了後は記事作成です。あふれる熱い思いや興味深いエピソードをたくさんお聞きしたので、簡潔にまとめることは大変でした。皆様の熱量や魅力が伝わる記事を書くことを心がけました。できあがった

記事を読むと、インタビューでのやり取りやお人柄を思い起こします。貴重なお話を聞かせてくださった皆様に感謝いたします。

チーム名の Firebricks とは耐火レンガです。幕末の集成館では、在来の薩摩焼の技術を用いて試行錯誤して製作した耐火レンガで反射炉を構築し、大砲製造に成功しました。レンガは小さなパーツですが、組み合わせることで大事業を成し遂げました。世界遺産に関わる活動も同じです。一人一人は小さな存在でも、皆で協力することで大きな成果につながります。順調にいかず、紆余曲折しながらも、着実に前に進む。過去の人々の功績に、現在の私たちの活動をさらに積み重ね、未来につなげる。そのような決意を込めました。

インタビュー活動を通して、私たちは多くの人の思いを受け取りました。特に印象深かったお話を中心に記事をまとめましたが、本当はもっとたくさん伝えたいことがありました。インタビューに応じてくださった方々は現在も最前線で活動されています。ぜひ現地を訪れたり、活動に参加したりして、直接お話を聞いてみてください。次に思いを託されるのはあなたかもしれません。

記念インタビュー誌の制作を経て、大学生が考えたことを聞きました。

■記念インタビュー誌の活動に参加した動機を教えてください。

大学1年生の夏休み明け。授業とバイト、休日は動画を見る日々で、時間だけが過ぎる感覚。何かしたいと思っていた時に募集を見つけ、世界遺産や取材という言葉に惹かれました。／県外出身で、鹿児島の遺産や歴史に詳しくないので、知りたいと思いました。将来公務員を目指しているの、行政や関わるお仕事をしている方と直接お話しできるよい機会だと思いました。／近現代センターの学生サポーター／これまでは自然遺産の保全活用を中心に活動していました。文化遺産にも関わることで、自身の活動のヒントになるものがあるのではないかと考え、挑戦しました。／2024年度に実施した「ふるさと歴史調査隊」の運営に関わる中で、プロジェクトへの参加のお誘いをうけました。／鹿児島の誇れる世界文化遺産の節目の年に自分も何らかの形で携わってみたいからです。／将来文化財に関わる職に就きたいと考えているので、実際に携わっている方々に関わるよい機会だと思いました。／活動募集を聞いて、鹿児島に世界遺産があることを初めて知りました。鹿児島をもっと知ることができるチャンスだし、世界遺産に関わる方々のお話を聞ける貴重な経験になると思いました。／鹿児島市出身ですが、地元の世界遺産がある意識がありませんでした。鹿児島のことをもっと知りたい、関わる人の想いを知りたいと思いました。

■インタビュー取材や記事作成を通して考えたことを教えてください。

登録されるまで長い時間がかかったこと、登録後も多くの人が関わってきたことを知り、それぞれの思いが積み重なって今の姿があると考えました。インタビューが終わる頃には、一人一人のファンになっていて、魅力を伝えたいと思いながら記事を書きました。／思っていた以上に多くの方が関わっていました。様々な立場の方が世界遺産を次世代へ残そうと必死に活動されていました。役割や立場によって考え方が異なることも感じました。／世界遺産は登録が終わりではないことを学びました。将来まで守っていかなければならない、そのためにどうするか課題に向き合っていることを知りました。若い世代にも遺産の背景や素晴らしさを知り、同じ気持ちで遺産に向き合ってほしいという皆さんの思いが伝わりました。／普段何気なく過ごしている地域や利用している施設の裏には、携わっている人々の熱い思いが隠れていることを再確認しました。／保存・活用の方針策定から近隣の駐車場確保まで、思ったよりも文化財に関わる人は多いと感じました。「自分は詳しくないから」と取材を遠慮した方もいました。無意識に世界遺産に関わっていることもあるのだと驚きました。／アピールに力を入れる立場もあれば、歴史的景観を守るために技術を「隠す」ことに力を入れる立場もありました。「自分の仕事を見えないようにしている」ことが興味深かったです。／予定時間を越えてたくさんの思いをうかがいました。記事に書ききれなかったことが悔やまれます。今回発見した各遺産の好きなどを周りの人にも伝えたいです。／取材を通して皆さんが自分の活動に対して熱い思いで取り組んでいることが強く伝わり、その熱量がそのまま伝わる記事を書くことを心がけました。Webで調べても分からない深い話を聞いたり、建物を案内してもらったりして、世界遺産をより身近に感じることができました。

■活動前後で、世界遺産に対する見方や考え方は変わりましたか？

壮大すごいけど、よく分からない過去のものだと思っていました。活動を通して、モノに人々の苦労や思いを感じ、それも含めて世界遺産の価値だと考えるようになりました。世界遺産とつながりができて、身近に感じるようになりました。／鹿児島には文化遺産、自然遺産があり、それぞれ独立しているのではなく、お互いがあるからこそ価値が生まれていることに気づきました。／「鹿児島の世界遺産は、見るだけですごい！と思うのが難しいからこそ、遺産の歴史的価値や背景も知らなければならない」と皆さんが口々に仰ってて、私も深く共感しました。行政だけでなく、さまざまな業種や地域の方に守られていることが分かりました。／世界遺産はそのものに価値があると思っていましたが、多くの人に支えられていて、これまでの歴史の歩みを知ることにより良さが分かるものだと考えました。／構成資産について多角的視点から考えられるようになりました。取材前は、その人でないと話せない情報を引き出すべく、念入りに下調べしました。この過程がとても有意義で、遺産の解像度が自分の中で一気に上がったと感じました。／活動前は観光資源と思っていましたが、活動を通して世界遺産は人と人をつなぐ場という考えに変わりました。私も魅力を発信する立場になりたいです。／人に焦点をあてて話をうかがうことで、世界遺産が単なる歴史的建造物ではなく、世代を超えて受け継がれる価値を内包していることを実感しました。世界遺産と聞くと遠いものになりますが、地域の方々にとっては暮らしに根付いたものです。日本の産業革命に寄与した歴史的に非常に価値のあるものですが、地域にとっては、人と人をつなぐ、地域をつなぐハブとなっている遺産という認識になりました。

■より多くの人が世界遺産に関心を持つためにはどのような取組が効果があると思いますか？

世界遺産に関わる方々のお話を聞き、実際に足を運ぶことで初めて身近な存在になり、多くの魅力を感じました。関わりをもつ取組が効果があります。現地訪問が難しい人には、VRなどで体験できる場があるといいですね。／一般人や専門家の区別なく相互に交流できるシンポジウムや座談会を開き、様々な人が自由に関わることでたくさん人の化学反応が起きて、従来にはない視点が生まれると思います。／世界遺産を巡るツアー。周遊シャトルバスの運行。／文化遺産だけでは維持困難。寺山の事例のように、自然環境と絡めた活動や学校での環境教育が有効です。子どもが日々の学びを親に伝えることで、世界遺産を「知っている」人が増えます。「教材のつながり」と「人のつながり」が生まれ、持続可能な社会構築への可能性があります。／気軽に参加できることから関わりはじめるように、興味をもつためのフックをつくりたい。／世界遺産の企画展。世界遺産を新しく知る人が出てきそうです。／「この遺産の価値を伝えるのは難しい」という苦労話を毎回聞きました。寺山の森のプロジェクトのように地道な活動を続けて、保全活動に直接関わる機会を増やす中で愛着を持ってもらうのが一番です。／世界遺産を未来に残す意義を理解し、行動する人が減少している地域の課題。鍵となるのは子ども。地域と学校が連携して、地域の歴史や環境保護とも絡めた実践学習。地域の行事に家族で顔を出す人が増えるのも期待。／文化遺産の価値の維持や創造に寄与するのは、一部の特殊な職業や環境の人だけでなく、自分も文化財に関わっていると感ずることにより興味をもってくれそう。／世界遺産があることだけでなく、その凄さや魅力が分かるような宣伝が効果的だと思います。／世界遺産単体の紹介よりも、活動や事業と一緒にすることで、目的ではなかった人も関心をもつと思いました。

■鹿児島市に世界遺産があつてよかったですか？ ※全員が「よかった」と回答！

自分のふるさとに貴重な世界遺産があることは、地元への愛着につながります。他県の世界遺産に目を向けるきっかけになり、知見がさらに広がりました。／文化と自然の調和（環境文化）を他地域よりも最先端で進めることができます。／鹿児島市は強力な資源をもっています。人と人のつながりのハブとなり、活用次第で鹿児島を魅力づけるものとなるでしょう。／「登録前は歴史に詳しい人だけが価値を分かっていたけど、今は地元の人が鹿児島の誇りと思っている」と聞きました。世界遺産をきっかけに鹿児島にきたり、地元を誇りに思えるようになったのは、とてもよいことだと思います。／観光などの経済的恩恵だけでなく、教育的価値、歴史的価値、郷土愛を育む土壤になります。遺産の創造に携わることが、世界遺産以外の文化財の保存・活用にもよい影響を与えるでしょう。／世界遺産の保全に関わる活動が、鹿児島のことを誇りに思う気持ちを継承するかけがえのない機会になっています。何十年と継続することができれば、遺産の価値をもっと高めることができると期待しています。／観光客が集まり、町や人びとが活気づきます。／文化遺産は地域の履歴や先人の活躍を示すものです。鹿児島の履歴を文化遺産を通して知することは県民にも観光客にも良いです。／インタビューを通して、世界遺産はただ歴史を語るものではなく、現代において人と人をつなぐことに大きく貢献していると強く感じました。観光客とガイド、学生と地域の人など、世界遺産がなければ生まれなかったつながりが多くあります。私も多くの人と関わることができました。／世界遺産の知名度は大きいです。世界遺産がきっかけとなって自分の住むところをより知ろうと思うのは良いことです。

記念インタビュー誌制作活動を通して、大学生の考えは大きく変化しました。最初は世界遺産に対して漠然とした印象を持っていましたが、世界遺産に関わる人々と直接お話をする機会を得たことで、世界遺産そのものに価値があるだけでなく、世界遺産を媒介としてさまざまな人、コミュニティ、地域そして歴史がつながることで新たな価値が生まれることに気付きました。同時に、世界遺産に登録されたからこそ生じている課題も知りました。世界遺産を受け継ぐのは人です。そのために自分たちに何ができるのかを考える契機になりました。

した。

世界遺産というと構成資産そのものが注目されやすいです。今回の記念インタビュー誌では「人」に注目することで、世界遺産に関わることは特別なことではなく、私たちの日常の営みの一部であることを示しました。多様な立場の人々に目を向け、思いに共感し、受けとめた情熱を自分の言葉で表現した学生たちを誇りに思います。今後も、それぞれの人生で世界遺産に関わり続けてくれることを期待します。

世界遺産のために わたしたちができること

石田 智子

(鹿児島大学法文学部准教授／集成館地区整備活用専門家委員会委員)

記念インタビュー誌の制作を通して、わたしたちは世界遺産に関わる人々から思いを受け取りました。これは世界遺産登録前後に活動してきた同時代の仲間たちの記録です。熱い思いに触れて、次はあなたの物語を始めてください。これまでの積み重ねを踏まえて、さらなる新たな展開につながることに楽しみます。そのためには、今のわたしたちに何ができるのか、一緒に考えてみましょう。

まず、「知ること」です。鹿児島に「明治日本の産業革命遺産」の構成資産が存在することを知り、誇りに思う人が増えることで、長期にわたって地域に根付き愛される世界遺産になります。その際に、「世界遺産だから／価値があると聞いたから／守る必要があるから守る」では続きません。自分ごととして捉えて、「私にとって大事だから守る」という素直な気持ちを動機にしてほしいです。地域住民にとっては、日常生活空間が新たに価値付けされたことで特別な場所となり、多様な人が集まり、対話が生まれる場へと変化しました。現地探訪やガイドを通して理解や魅力を広めることで、地域住民ではなくても世界遺産を大切に思う仲間が増え、裾野が広がります。

知るためには、学術的な調査研究や保全活動の継続実施が基盤となります。歴史をつなぐということは、既存の成果をそのまま受け渡すことではなく、たゆまぬ調査研究を通して常に新たな知見を生み出し価値を増幅させ続けることです。また、世界遺産を長期にわたって保全するためには、建造物などの遺産そのものの経年変化や損傷への対応だけでなく、遺産を取り巻く周辺環境も合わせて人間が関与し続ける必要があります。基礎的な地道な努力を継続することで、大事な世界遺産を未来の人と共有できます。

次に、「関わること」です。世界遺産との関わりは自由です。「明治日本の産業革命遺産」は、圧倒される迫力や一見して意義が分かるものではないからこそ、多様な立場からさまざまな方法で参入する余地があります。専門家だけでなく、誰もが新たな価値創造の当事者です。世界遺産としての普遍的価値の維持と多様で自由な取組は両立できます。多角的視点で見つめ直すことで、あるものを最大限に活用し、新たな創造活動につながることもあるでしょう。何ができるか、ぜひ楽しみながら考えてみてください。

最後に、「続けること」です。世界遺産登録前後に主体的に関わってきた担い手の高齢化が進み、次世代への継承が課題として挙げられています。そのような状況において、地域の学校の生徒による主体的なガイド活動や探究学習、どんぐり苗植樹の参加者による取組の継続発展、地域に関心をもつ大学生による丁寧なインタビュー活動などは希望の光であり、世界遺産の価値を未来につなぐ姿そのものです。上の世代が手はずを整えなくても、彼らはすでに柔軟に、自分たちに合うやりかたで行動しています。わたしたちにできることは、次世代を信頼して託すことです。そのためには、横断的な連携を生かして興味関心を持続する仕組みを作ること、取組の成果を公開して情報を共有すること、皆で一緒に楽しむことが肝心でしょう。

世界遺産登録はゴールではなく新たなスタートです。登録されてから10年、今は「わたしたちの世界遺産」になる道中であり、その過程で多面的な価値や人のつながりが生み出されています。世界遺産のまだ見たことのない新たな魅力を発見するために、引き続き皆で協力して取り組みましょう。

世界遺産登録 10 周年記念インタビュー誌制作プロジェクトメンバー

赤井 洸太	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
有村 美香	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
北園 光望	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
京田 遥香	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
徳野 明日香	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
萩尾 遥菜	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
平井 優成	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
渡部 こころ	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 2 年
末川 愛梨	鹿児島大学法文学部法経社会学科地域社会コース 2 年
山本 尚昌	鹿児島大学法文学部法経社会学科法学コース 3 年
上川路 亮太	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 3 年
出羽 空	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 4 年
山元 創平	鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース 4 年
住吉 太郎	鹿児島大学大学院人文社会科学研究科修士課程 2 年
石田 智子	鹿児島大学法文学部人文学科准教授 法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター兼担教員
松田 忠大	鹿児島大学法文学部法経社会学科教授 法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター副センター長
伴野 文亮	法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター特任准教授
協力	
福永 顕	鹿児島市教育委員会管理部文化財課世界遺産保全係
藤井 大祐	鹿児島市教育委員会管理部文化財課世界遺産保全係

世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」
鹿児島エリア 登録 10 周年記念インタビュー誌

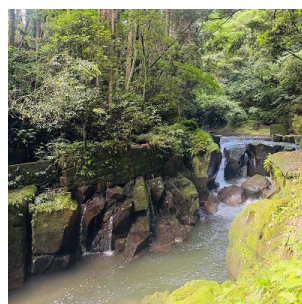
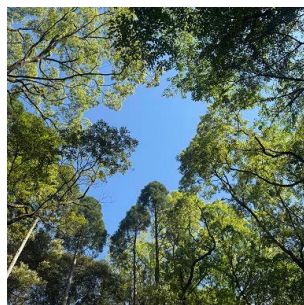
世界遺産とわたしたち 大学生とともに紡ぐメッセージ

2025 年 7 月 26 日 電子版発行

監修 鹿児島市教育委員会管理部文化財課世界遺産保全係
鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

編集 石田 智子

問い合わせ先 鹿児島市教育委員会管理部文化財課世界遺産保全係
〒 892-0816 鹿児島市山下町 6 番 1 号
TEL 099- 227-1940



世界遺産登録 10 周年記念インタビュー誌
 世界遺産とわたしたち
 大学生とともに紡ぐメッセージ